

タイトル	<資料>北海学園ーレスブリッジ大学教員交換プログラムの現状と課題
著者	二通，信子；上野，之江；岡崎，敦男
引用	北海学園大学学園論集，116：119-166
発行日	2003-06-25

北海学園—レスブリッジ大学教員交換プログラムの 現状と課題

二	通	信	子
上	野	之	江
岡	崎	敦	男

1. はじめに

北海学園とカナダ、アルバータ州立レスブリッジ大学とは 1981 年以來 20 年以上にわたって交流を進めてきた。この間に交換教授として交流に参加した教員は双方で合わせて 75 名に達しており、交換教授による科目はそれぞれの大学の全学共通科目として定着してきた。昨今の大学の国際化の流れの中で、各大学において海外の大学や研究機関からの研究者の招聘や提携大学との学生交流事業などが積極的に取り組まれるようになってきているが、本稿で取り上げるような、教員が相互の大学で授業を担当するという形の教員交換プログラムはそれほど例がないという。双方の大学にとって全く新しい試みを軌道に乗せ 20 年以上維持してきた過程には、関係者の様々な苦勞があったことと推察される。

レスブリッジ大学との教員交換プログラムは、このように長期にわたり実績を積み重ねてきているが、その実態については関係者以外にはあまり知られておらず、一般の教員の関心も薄い。それはこのプログラムが大学同士の交流というよりも、学校法人北海学園とレスブリッジ大学との交流協定により法人事務局が窓口となって行われてきたという経過が影響しているのであろう。現在は大学内での体制も整えられてきているものの、こうした経緯もあって、大学側にこれまでの教員交換プログラムについての全体像をまとめた記録もなく、また、レスブリッジ大学への派遣についても、派遣予定の教員がその都度個人的に情報を集め現地での職務に対応するという状況が続いてきた。教員の帰国後も、派遣先での経験を検証しその後のプログラムの改善に反映させるという機会がなかった。

本稿の筆者 3 名のうち、二通と上野はそれぞれ 2000 年度、2001 年度の交換教授として、また岡崎はカナダ・コースの 2002 年度の責任者として、近年この教員交換プログラムに関わってきた。そうした経験から、このプログラムの経過と到達点を明らかにする必要を感じ、本稿を執筆するに至った。なお、このレスブリッジ大学との交流事業には教員と学生のそれぞれの交換プログラムが含まれているが、本稿では教員交換のみを扱うことにする。

本稿の目的は、第一に、交流20年の節目にこれまでの教員交換プログラムの経過を明らかにし内外の人々に交流の内容を知らせること、第二に、今後交換教授としてこのプログラムに参加する人々に現地での職務や生活に関する具体的な情報を提供すること、第三に、現在の到達点を明らかにし今後の課題について整理することにある。本稿の全6章のうち、第1章、第2章、第3章の後半を二通が、第3章の前半及び第5章の後半を岡崎が、第4章を上野が担当する。第5章の前半については筆者全員の話し合いの結果を二通がまとめる。また、最後の第6章には、2002年度交換教授のレネ・ブーレ (R ne Boer ) レスブリッジ大学教授、1987年度交換教授の佐藤克廣北海学園大学教授、1992年度及び2002年度交換教授の植木幹雄北海学園大学教授の三氏の感想文を掲載する。

2. 交流の概要

2.1 教員交換プログラムとは

レスブリッジ大学との教員交流プログラムは、北海学園とレスブリッジ大学との協定に基づいて毎年相互に教員を派遣し、その教員が派遣先の大学での講義を担当するというものである。現在、レスブリッジ大学からは前期と後期に1名ずつの教員が北海学園大学に派遣され「カナダの自然と社会 I, II」の授業を、北海学園からはレスブリッジ大学の秋学期(9月~12月)に北海学園大学の教員1名が、春学期(1月~4月)に北海学園北見大学の教員1名がそれぞれ派遣され「Japan and Japanese」の授業を担当している。2003年4月現在で教員交換プログラムに参加した教員はレスブリッジ大学側が43名、北海学園側は北海学園大学から18名(うち2名は2回派遣)、北海学園北見大学から14名(うち1名は北海学園北見短期大学より派遣)の32名で、両大学併せて75名に及んでいる。一方、1986年から始まった学生交換事業については、隔年ごとに相互の大学から派遣する形でこれまでレスブリッジ大学から延べ115名、北海学園大学からも延べ170名の学生が参加している。

教員の受入れや派遣に関する態勢については、北海学園側とレスブリッジ大学側とでかなり異なっている。まず、北海学園では、この教員交換プログラムは法人の事業として遂行されており、北海学園からの派遣やレスブリッジ大学からの教員の受入れは法人事務局を窓口として行われる。その上で、交換教授の大学での授業や生活全般に関することは、大学の関係部局が協力しながら対応している。一方、レスブリッジ大学においては、International Centre for Students (以下、インターナショナルセンター) が主体となってこの交換プログラムを運営しており、交換教授の大学での授業や住居に関することなどすべてがインターナショナルセンターのスタッフの担当となっている。ちなみに、このインターナショナルセンターは日本の大学の留学生センターと全学の学生を対象とする学生センターとを併せたような組織で、業務の一環として、留学生や新生を対象とした「大学での学習のためのライティング」や「スタディ・スキルズ」などの特別クラスを開講している。また、全学生のための「ライティング・センター」もインターナシヨナ

ルセンターの下に設置されている。

北海学園大学内の交換教授の送り出し及び受入れについては以下のような態勢になっている。まず、レスブリッジ大学への交換教授の人選は、国際交流委員会によって行われる。交換教授は国際交流委員会の推薦の後、協議会の承認を経て、学長からの辞令によって派遣される。派遣に関わる事務手続きは大学の庶務課が担当している。なお、交換教授は派遣先の大学に一時的に雇用される形となる。一方、レスブリッジ大学からの交換教授は、法人との雇用契約を結ぶ。交換教授の受入れまでの手続き、入国監理局などとの対応、宿舍の提供などは法人の事務局が担当し、大学での担当の講義に関わることについては共通教育委員会の下のカナダ・コース小委員会の管轄となる。講義における通訳などのサポートはカナダ・コース小委員会から委嘱されたコーディネータが、授業に関する事務については共通教育センターの事務職員が、それぞれ対応する。また、受入れ後の生活全般に関わることは大学の庶務課の国際交流担当者が法人事務局の協力を得ながら対応している。

2.2 レスブリッジ市及びレスブリッジ大学の紹介

2.2.1 レスブリッジ市

レスブリッジ市は、アルバータ州の南の平原地帯に広がる商業都市である。市内から車で1時間足らずでアメリカ合衆国の国境（モンタナ州）に達する。アルバータ州は牛肉の産地で、レスブリッジの郊外に出ると、地平線の彼方まで牧草地帯が広がり、のんびりと草を食む牛があらこちらに見える。気候は内陸型で雨が極端に少なく、冬も積雪はそれほど多くないが、寒暖の差が大きく、夏は35度、冬はマイナス30度以下になることもある。

市の人口は68,000人ほどで、市内や周辺地域に日系人が多く住んでおり、市内には後に紹介するような日本庭園の他に、お寺や、日本食レストラン、日本の食料品の店などがある。レスブリッジ市を含む南アルバータの日系人の多くは太平洋戦争の勃発後、カナダ連邦政府の方針でカナダの太平洋沿岸地域から内陸部へ強制移動させられた人々やその子や孫たちである。当時、多くの日系人が南アルバータでのシュガービートの農場での過酷な労働に従事しており、最盛期には南アルバータだけで3万人もの日系人が住んでいたという（村井，1995）。

レスブリッジ市内には Nikka Yuko Japanese Garden（「日加友好日本庭園」）という茶室付きの日本家屋を擁する、本格的な日本庭園がある。この庭園は、1967年に日本とカナダの友好のシンボルとして日系人市民の基金により建設されたもので、市民に公開

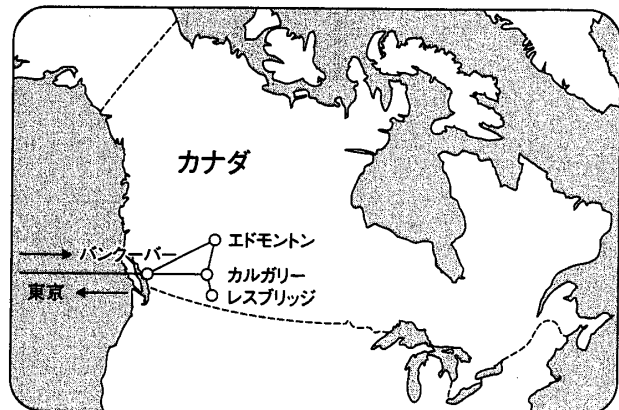


図1：レスブリッジ市の位置（「北海学園・レスブリッジ大学学生交換プログラム交換学生募集要項」より）



図2：レスブリッジ市の日加友好日本庭園 写真提供：植木幹雄北海学園大学教授

されるとともに、様々な交流行事や日本文化の紹介に利用されている。2000年に行われたレスブリッジ大学と北海学園大学の交流プログラム延長の協定式もこの庭園内の建物で行われた。

戦後の移住者も含め、現在のレスブリッジや周辺地域の日系人人口は数千人に及ぶと言われている。レスブリッジ大学の教職員の中にも、数代前に総長を務めた日系2世のロバート広中氏をはじめ日系人が少なくない。中でも Nakamura Kazuo 元レスブリッジ大学教授は教員交換プログラムの調印時から一貫して交流に尽力されてきた。この Nakamura 氏をはじめとする市内の日系人グループが教員交換プログラムの開始当初から様々な面で協力しており、現在でも空港での出迎えから、家族の買い物などの世話、病気や怪我などの緊急時の対応など、「縁の下での力持ち」の役割を果たしている。交換教授でそうした日系人の方々のお世話にならなかった者はおそらくいないであろう。北海学園とレスブリッジ大学との交流が発展してきた背景には、上述したようなレスブリッジの土地柄や日系人コミュニティの積極的な協力があると言える。

2.2.2 レスブリッジ大学

レスブリッジ大学は州立の大学で、レスブリッジ市内では唯一の総合大学である。大学のランクを掲載している雑誌、Maclean's によると、2002年度の大学としての総合ランクはカナダで8番目に位置しているという。Arts & Science (教養)、Management (経営)、Fine Arts (芸術)、Education (教育)、Health Science (健康科学)の5学部で構成されており、学生数は約7,000人で、学生はアルバータ州及び州外の各地から集まってきている。留学生も日本を含む約40ヶ国

から来ている。レスブリッジ大学には外国語科目の一つとして日本語のコースもあり，鶴沢梢教授と西林フキ非常勤講師の二人が指導にあたっている。学生数では北海学園大学とあまり変わらないが，キャンパスは広く，傾斜のある土地に大学の建物がゆったりと配置されている。学内には大小4つの劇場やアートギャラリーなどがあり，外部の芸術家や芸術学部の学

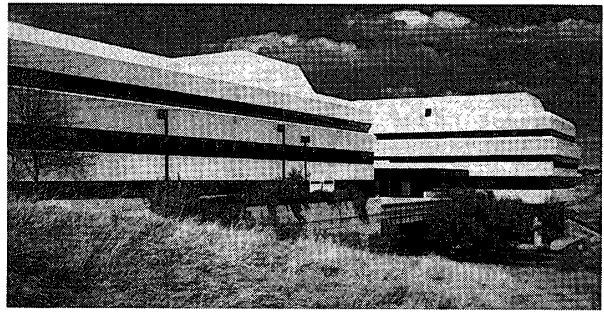


図3：レスブリッジ大学（「北海学園・レスブリッジ大学学生交換プログラム交換学生募集要項」より）

生による演劇や演奏会などが定期的に行われており，大学が市民にとっての文化センターのような役割も果たしている。また，2.1でも述べたように，レスブリッジ大学には留学生のための英語の予備教育のコースが併設されており，レスブリッジ大学への進学を目指す各国からの留学生が学んでいる。北海学園からの交換学生の英語の指導もこのコースによって行われている。

2.2.3 交流の経過

レスブリッジ大学との交流は，1980年のアルバータ州との姉妹提携締結に端を発している。北海道は1970年代の初めから自然条件の類似した北方圏の地域との交流を提唱していた。1972年には北海道からカナダ及びアラスカ州に経済文化視察団が派遣され，その後北海道とアルバータ州の間で，スポーツ交流，農業技術者交流，青年・女性の派遣などの交流が始まった。それらの交流を土台に，1980年に北海道とアルバータ州との姉妹提携が調印され，北海学園大学の森本正夫理事長もこの姉妹提携調印団の一員としてカナダを訪問した。森本理事長はカルガリーでの調印式の後，同じアルバータ州のレスブリッジ市に立ち寄り，レスブリッジ大学の関係者と懇談した。その折にレスブリッジ大学側から大学間交流への強い意欲と期待が示されたという。この訪問直後に，森本理事長と当時の寺田北海道副知事のもとにレスブリッジ大学から教員及び学生の交流を要請する手紙が届く。そうした要請を受ける形で，翌1981年に森本理事長が再度レスブリッジ大学を訪問し，北海学園とレスブリッジ大学との交流提携を結ぶ。森本理事長は後のレスブリッジ大学訪問の帰国報告で当時を振り返り，「対等交流を原則として，道とア州の協力のもとに，北海学園とレスブリッジ大学との交流提携が成立し」と記している。

1981年9月にはレスブリッジ大学から最初の交換教授が着任した。その後1983年12月までは1学期に1名の割合でレスブリッジ大学から教員が派遣されてきている。1984年に森本理事長とレスブリッジ大学のジョン・ウッズ学長との間で教員の交換に関する協定書が交わされ，この年に北海学園大学からの教員の派遣も始まった。1984年の協定書では教員の交換について次のような合意がなされている。

1. 教員交流は相互的なもので，レスブリッジ大学は北海学園大学に学期ごとに教員を派遣すること，北海学園大学はレスブリッジ大学に一つまたは二つの学期に教員を派遣すること。

2. レスブリッジ大学と北海学園大学はお互いの担当者や職員の訪問を歓迎すること
3. 1985年からの学生交換の開始のために努力すること
4. レスブリッジ大学と北海学園大学は、共同研究の取組みを将来に向けて計画すること

その後、1986年8月に当時の北海学園大学の田中修学長とレスブリッジ大学のケナン学長代行との間で、学生交換及び教員交換プログラムについての覚書きが交わされている。その覚書きで、教員交流を北海学園北見大学にも拡大することが確認されている。こうして1990年以降は北海学園北見大学からの教員派遣も始まり、9月から12月までは北海学園大学から、翌年1月から4月までは北海学園北見大学から派遣するという現在の態勢が確立した。1994年には森本理事長ほか、当時の坂上北海学園大学学長、堀北海道知事などがレスブリッジを訪問し、交流10周年祝賀行事に出席している。1988年10月に森本理事長と当時のテナント学長との間で交わされた協定書では、学術研究の共同出版、学生の留学にあたっての単位互換、レスブリッジ・コミュニティ・カレッジと北見女子短大との交流などの可能性についても言及されている。このうち、学生の単位互換を含む留学については2003年度から実現することになった。

交流開始から20年を迎え、2000年10月にレスブリッジ大学において、交流プログラムの継続の合意書が森本理事長とウィリアム・ケイド現学長によって取り交わされている。さらに2003年3月には、北海学園大学とレスブリッジ大学との間で、主に学生交換を対象とした協定覚書きが取り交わされ、この協定によって、従来からの短期の学生交換に加えて、1学期または2学期に渡る学生交換事業が実現されることになった。北海学園の法人主導で始まったレスブリッジ大学との交流事業だが、近年は北海学園大学及びレスブリッジ大学の学長同士の訪問や懇談が行われている。この交流プログラムが名実ともに大学間の交流事業へと発展していくことが期待される。



図4：レスブリッジ大学の卒業式で、元交換教授たちの記念写真（2000年10月）

3. コース及び授業内容について

本節では、両校の交換教授の行う授業について、その位置づけ・支援体制・授業内容などを説明する。

3.1 北海学園大学において

3.1.1 科目としての位置付け、担当部局及び支援体制

レスブリッジ大学交換教授は共通基礎科目「カナダの自然と社会Ⅰ，Ⅱ」を担当する。この授業の主な目的はカナダの自然と社会（言語，歴史，文化，産業，政治，宗教など）についての基礎的な知識を与えることである。また，カナダ人の教員が英語で行う授業にふれることで履修者の英語力が上達することも期待されている。講義は，全体としては入門レベルのものだが，交換教授の専門領域の話が1，2回入ることもある。

授業に関することからの担当部局は共通教育・研究センターであり，担当委員会は共通教育委員会，とくにその下部委員会であるカナダ・コース小委員会（以下，小委員会）である。授業の内容・試験の実施方法・成績評価の基準などについては，交換教授ごとにおおきなばらつきがでたりしないように，小委員会によりガイドラインが定められている（資料2参照）。また，小委員会は，空港送迎，各種セレモニーへの出席や市内・道内視察旅行への同行といったような，授業とは直接関係のない業務も行っている。

交換教授のノルマは本学専任教員と同じ週4講である。2001年度と2002年度は週4講（1部3講，2部1講）の同一講義が行われた。それ以前は，週3講（1部2講，2部1講）の同一講義と週1講の出張講義（他の教員の授業に出向いての講義）が行われていた。これはコーディネータを4講分確保するのが困難だったという事情によるようである。コーディネータが週4講分確保できたからといって，同一講義を週4講行うことがいいかどうかは判断の難しいところであり，2003年度は，また2000年度以前のように週3講の同一講義と週1講の出張講義という方式に戻っている。交換教授は北海学園北見大学でも一度講義を行うことになっている。

3.1.2 授業の概要とコーディネータの役割

授業は，講義形式で行われ，交換教授が話す言葉をコーディネータと呼ばれる教員が通訳しながら進行する。前述のように，その内容はカナダの自然，言語，歴史，文化，産業，政治，宗教などについての基礎的な知識を与えるものとなっている。参考までに，2003年度「カナダの自然と社会Ⅰ」[バグワン・ドゥア（Bhagwan Dua）教授（政治学）担当]の講義概要を資料3にあげておく。

交換教授の話す内容は，毎回詳細な英文のレジュメとして学生に配られる。授業は，基本的にはレジュメを読み上げる形であるが，視覚に訴えるために資料をプロジェクタで投影する交換教

授も多い(図5参照)。

毎回詳細なレジюмеが配られるとはいえ、レジюмеにない説明も行われるし。履修者の英語力もかならずしも高くはないので、授業の内容を伝える上でコーディネータの役割は重要である。コーディネータのほとんどはカナダの専門家ではないので、聞き間違いや勘違いにより、交換教授の言葉を間違えて伝える危険性が常に存在する。このことは、コーディネータに大きなプレッシャーを与えている。コーディネータの主な役割は、交換教授の言葉を学生に、学生の言葉を交換教授に伝えることであるが、同時に、その作業を通して、英語による授業に対する学生の抵抗感をなくし、交換教授と学生を結びつける役割を果たすことも期待されている。また、コーディネータは授業・試験・成績評価作業を円滑に運営するために、交換教授を様々な面で支援する。授業の運営に必要な数のコーディネータを確保することはカナダ・コース小委員会の重要な、そしてもっとも困難な、仕事のひとつとなっている。

授業の全履修者数は、この数年400～500名で推移していたが、2003年度は少し増加した(表1参照)。クラスの規模は、2部授業では数十名だが、1部授業では300名を超える場合もある。レスブリッジ大学では、教員と学生の相互作用を保証するため、平均的なクラスの規模を25名とし

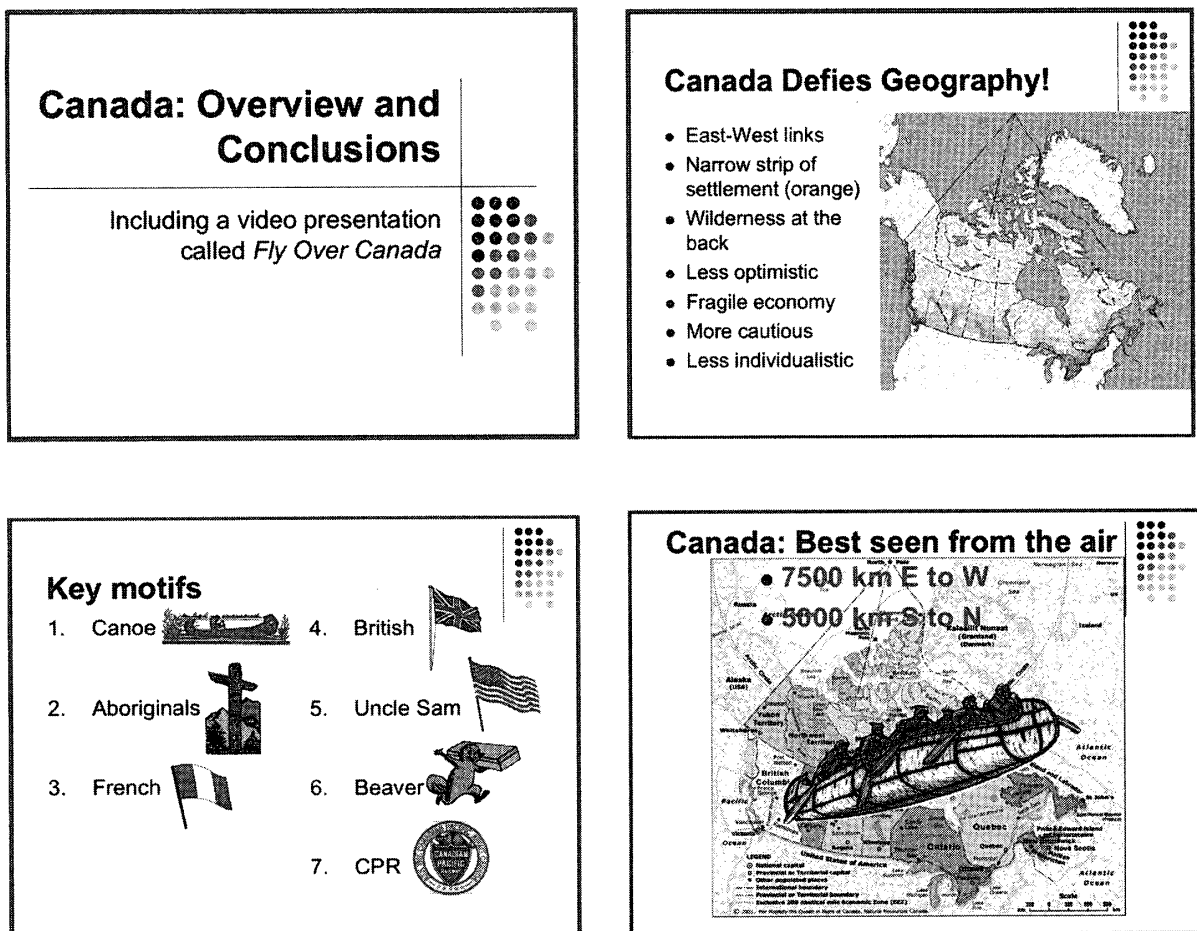


図5：視覚に訴える授業を行う交換教授も多い(2002年度後期授業から引用)。

表 1：カナダ・コース授業履修者数の推移

年度	学期	履修者数	
		1 部	2 部
2000	前期	435	53
	後期	387	52
2001	前期	361	39
	後期	309	19
2002	前期	461	47
	後期	424	22
2003	前期	605	78
	後期	576	62

ているので、交換教授にとっては北海学園大学のマスプロ授業は驚きであるようだ。「これで教育ができるのか？ これでは教えるだけで手一杯になってしまうだろう。研究をする時間はあるのか？」と聞かれたこともある。

履修者数の多さと交換教授の滞在期間の制約から、試験はマークカードを用いて行われている。回数は半期につき 2 回が普通である。現在のところ、マークカードの読み取り、および結果の処理は専任教員の助力を得て行っている。

試験の結果は、1 週間後に学生に知らされる。成績に関する質問は、交換教授帰国前ならコーディネータが交換教授に取り次ぎ、帰国後ならカナダ・コース小委員会委員長と共通教育・研究センター事務が対応する。

2001 年度までは、コーディネータのもう一つ重要な仕事として、採点表の転記作業があった。2002 年度からは、この作業は交換教授に行ってもらっている。ただし、交換教授は日本語で書かれた学生氏名を読むことができないので、成績を決める段階だけでなく、成績を採点表へ転記する際にも間違いが入り込む可能性がある。したがって、コーディネータには採点表への成績の転記が正しく行われたのか確認をお願いしている。それでも、交換教授が日本語氏名を読めないことによる評価ミスが学生の問い合わせの結果明らかになるという事態が、しばしば発生している。成績評価の間違いはあってはならないことなので、英語版の出席簿と採点表の作成が強く望まれるところである。

3.2 レスブリッジ大学において—2000 年秋学期のコースを例に

3.2.1 科目としての位置付け及び担当部局

北海学園の交換教授の担当科目は、全学共通の Interdisciplinary Studies (学際研究) の「Japan

and Japanese」として設定されている。講義概要には科目の内容について「The Japanese world view; history, culture and society of Japan and the Western world」と記されている。北海学園の法人事務局からのプリントには、「講義は、日本の文化・歴史・政治・経済等のテーマの中から主要なテーマを決め行う」と書かれているが、具体的な内容は担当者に任されている。

2.1で述べたように、この科目はインターナショナルセンターの管轄になっており、通訳の手配も含めた授業に関する実務、渡航前の事務手続きから、住居、歓迎会・送別会などの行事の計画まで、すべてをインターナショナルセンターのスタッフが通常の業務に並行して行っている。コースのコーディネータについては前学期に北海学園に派遣された教員が務めることが慣例になっているようだが、北海学園のように組織化されたものではなく、個々の教員の自発的な活動に任されているようである。講義の通訳については、交換教授の希望によって学外から配置される。これまでは、ほとんどの場合、Konosu 元レスブリッジ大学教授の夫人である Konosu Hideko 氏が担当してきた。同氏は交流の当初からの協力者の一人で、交流プログラムの経過についても精通している。交換教授にとっては大変心強い存在である。

本節では以下に、本稿の筆者の一人である二通が担当した 2000 年秋学期の授業の状況を報告する。なお、本節の文中の「筆者」及び「担当者」とは二通を指す。

3.2.2 受講生の状況及び科目に対するニーズ

2000 年秋学期の受講者は 42 名で、台湾、中国、香港、韓国、マレーシア、シンガポール、日本などにルーツを持つアジア系のカナダ人や留学生が多く、その他にアラブ系やロシア系の学生、ネイティブ・カナディアン系の学生、宗教の布教活動のため日本で 2 年間生活をしたことのあるカナダ人学生など多彩なメンバーが含まれていた。日本人留学生も 6 名参加していた。まさに移民の国カナダの現状が学生の顔ぶれにそのまま反映していた。今振り返ってみると、彼らの日本に対する関心は、「欧米人から見た日本」という単純なものではなく、それぞれの持つ多様な背景が日本に対する印象や日本への関心に影響していたと考えられる。

また、学年は 1 年生から 4 年生まで混在し、専攻分野もすべての学部にまたがっていた。日本語の科目を履修している者も 5, 6 人いたが、日本語での挨拶やごく簡単な会話ができる程度であった。学生の中には卒業後に日本で英語指導助手として働くことを希望している者もいた。

受講生の状況を把握するために、コース開始時に以下の三つの点について簡単なアンケートを行った。どちらも選択肢に答えるもので、結果は以下の通りである。なお、()内の数字は回答数を示している。

①日本についてのイメージ——「日本」という言葉から思い浮かぶ言葉を書く (一人三つずつ)

rice・fish・sushi などの食べ物 (16), small land・island・mountain など地理的な特徴に関すること (14), technology・automobile・SONY・TOYOTA・HONDA など科学技術や車などのメーカーに関すること (11), polite・respect・peaceful・harmonious・arrogant な

どの形容詞（6），その他に，fashion（4），culture（2），economy（2），Tokyo（2）など

②日本についての情報源

日本のビデオや映画，漫画などを通じて日本を知るという回答が最も多かった。

③関心のある分野——最も関心のある分野を選択する

文化（11），社会（6），日本人（6），歴史（4），日本語（3），産業（2），習慣（2）

上のアンケートの結果から，彼らの日本についての知識は，ビデオや漫画，そしてレスブリッジで目にふれることができるものに限定されているという印象を受けた。「米，寿司，魚」などの日本食については日系人が多い土地柄から彼らにも比較的馴染みのあるものである。自動車や電気製品のブランド名も当地では浸透している。「polite」「respect」「peaceful」「harmonious」など，好意的にとらえる形容詞も多く出されていたが，それぞれの学生のどのような知識や経験から出てきたものか興味深い。またアンケートの③では，彼らが日本の文化に特に関心を持っていることがわかった。

3.2.3 授業の内容

授業時間は基本的に週150分で，50分講義を週3回，または75分授業を週2回のいずれかをレスブリッジ大学側が事前に連絡することになっているが，最近は後者の形が主体となっている。筆者が担当したコースでは，講義の目的を「日本の地理，社会，文化，人々の生活等について学び，日本についての理解を深めること」とし，合計26回の授業を「日本の地理と歴史」「日本の人々と社会」「日本の政治と経済」「日本文化」「日本語」の五つのパートに分けてそれぞれに4～5コマ程度を当てた。最後の「日本語」のところでは，日本語を教えるというよりも，日本語を一つの文化として取り上げ，その特徴を英語との比較から見ていくようにした。試験は中間と期末の2回，授業時間内で行った。成績評価は試験，グループ発表，出席及び授業への参加による総合評価とした。講義内容はそれぞれの交換教授によって多少の違いがある（巻末資料5に，2001年秋学期に派遣された上野の授業のシラバスを添える）。筆者の場合は，授業では毎回の話題について40～50分程度の講義と15～20分程度の学生の発表を組み合わせた。以下は学生たちの選んだグループ研究のテーマの例である。

「相撲—特に神道との結び付きについて」「日本の昔ばなし」「日本のアニメ『もののけ姫』とディズニーのアニメ『美女と野獣』の比較」「日本の折り紙と広島のSadakoの物語」「日本の英語教育と外国人英語実習助手プログラム」「日本人の娯楽—パチンコ」など。

こうした発表に加えて，授業に参加していた日本人留学生には「日本の塾でのアルバイトの経験」「野球少年として過ごした日々」「沖縄の人々の生活と基地」など日本での具体的な経験について発表してもらった。また，授業の1コマを使い，日本文化体験講座として，先に紹介した通訳の鴻巣秀子氏やその友人の日系人女性の協力を得て，生け花や茶道の実演，琴の演奏会などを



図6：レスブリッジ大学での授業風景—クラスで茶道の実演

行った。さらに、以前交換教授として北海学園大学で教えた経験のあるデイル・バーネット (Dale Burnett) 教授がゲストスピーカーとして来てくれ、自身の日本での経験や「源氏物語」の魅力について話してくれた。

講義に使用した教室にはOHP、ビデオ (VHS) が備え付けられている。ビデオテープは図書館のビデオライブラリーから借りて使用する。日本文化紹介に関するものとして「日本 その心と姿」「日本人のライフスタイル」など市販の英語版のビデオがある。これらのビデオはその日本語版が北海学園大学のビデオライブラリーにあるので、事前に内容を見ることができる。

試験は授業の中、または定期試験期間に行う。成績評価は12月の第3週ごろまでに規定の用紙に記入して、センターの担当者に提出する。成績がわかった段階で、自分の成績について納得がいかない学生は学内の調停委員会に提訴することができる。なお、学生はコース終了近くに、コース及び教師に対する評価やコメントを学内のコンピュータを使って学内の教育評価の担当部局に提出する。担当者には後日、その集計結果が渡される。

3.2.4 学生の参加状況及び感想

講義にあたって筆者が心掛けたことは次の2点であった。日本の文化を日本の地理的な位置、自然環境、歴史との関わりの中で紹介すること。ステレオタイプの日本文化、日本人像をなぞるのではなく、日本社会の多様な姿や課題、日本人の多様な価値観を知らせ、国や民族の枠組みを越えた同じ人間としての理解を広げること。

学生の受講態度は真面目で、講義開始時にはほとんどの学生が着席しており、授業中の私語もあまり見られなかった。大学全体の間試験の時期が近づくと欠席がやや多くなったものの、全体としては出席率は良かった。学生は総じて成績評価に敏感で、グループ発表の評価基準や試験の採点について学生からかなり質問を受けた。成績評価や試験、口頭発表などの採点の基準を事前に明確に示しておくことが重要である。

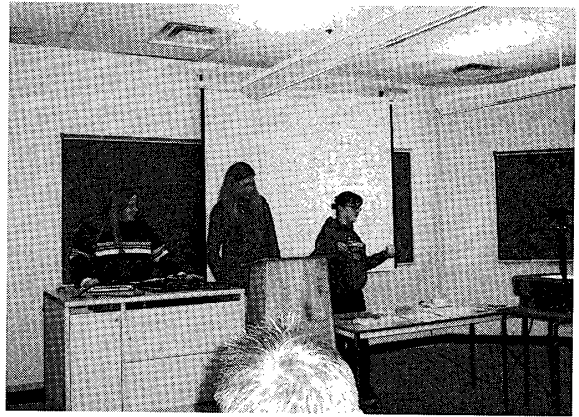


図7：レスブリッジ大学授業風景―クラスでの学生発表

クラス内での学生の発表は、日本紹介の参考書の内容をそのまま紹介するなど内容の掘り下げが浅いものもあったが、自分なりの問題意識をもって意欲的に取り組んだものもあった。1年生や留学生などの場合は、発表の仕方、ハンドアウトの作り方などについて慣れておらず、一方的に話すような形が多かったが、上級生になると発表にも慣れており、クイズ形式でのレポートで聴衆の興味を引きつけたり、全員が浴衣を着て発表に臨んだり、日本の昔話をドラマ化したりというように、レポーター自身も楽しみながら取り組んでいた。学生自身が他のグループの発表の優れた点を自発的に学んでいったようで、授業が進むにつれて発表の質も上がっていった。

学生たちはこの授業を受講することによって、程度の違いはあれ、日本人や日本の文化・社会についての理解を深め、自分の属している社会をより相対化して眺められるようになったようである。それは、北アメリカという強大な英語文化圏にどっぷり漬かって生活している彼らにとって、新鮮な経験であったことと思われる。以下に、コース終了後の学生の感想の一部を紹介する。

私はこれまでずっと日本人とカナダ人は違うと考えてきた。でも、今はそうじゃないと感じている。……このコースで学んだ一番大切なことは、他の文化や人々を、どのように見るかということである。つまりアウトサイダーとして外側から見るのではなく、自分自身や他のカナダ人と同じように問題を抱えたり、成功したりしながら生きている人々として見ることである。(J. T.)

このコースが始まったときは、私の日本についてのイメージは他のアジアの国々と同じだった。今、私は日本の文化が私のネイティブ・インディアン文化とかなり似ていることを知った。日本人の家族の強い絆や伝統、ネイティブ・インディアンとの言語の類似性などを知った。今、私にとって日本は、以前感じていたような「外国」ではなくなった。(T. M.) (この学生はコースを受講したことで日本に一層の関心を持ち、翌年夏の短期学生交換プログラムに参加した)

学生たちはコースの内容から自分なりに重要なことを学びとってくれたようである。しかし、授業の担当者としては反省する点もある。一つは、筆者自身の英語でのコミュニケーション能力に関わる問題である。授業では通訳をできるだけ介さず、自分自身の言葉で学生に直接語りかけたいと考えた。そのため相当の時間をかけて講義原稿を準備し、通訳の Konosu 氏に英語のチェックをしてもらったうえで授業に臨んだが、学生にとっては十分な説明ではなかったことが多かったと思う。学期の最後の学生によるコース評価でも、「授業内容についての明快な説明」という項目については他に比べ評価が低かった。

もう一つは、このコース自体の性格に関わる問題である。十数回の授業で日本の社会や文化について広く網羅しようとすれば、どうしても表面的かつ総花的な説明になりがちである。しかも、担当者にとっては専門外の内容が多い。相手の学生たちが日本についてどのような知識を持っているのかということも事前には把握しにくい上に、交換教授は1学期きりの経験であることから、講義内容の蓄積も難しい。過去の交換教授の方々もこうした不安を感じながらも、コース内容の一部に各自の専門分野に関わる内容を加えることにより、独自性を出す工夫をしてきたことと思う。筆者もそうした努力は行ったが、講義内容全体については、総花的で入門的な講義であったという印象は否めない。大学の科目としてこのような専門外の事柄を多く含む講義にどれだけの意義があるものなのか、またどのような授業を行えば、このコースがレスブリッジ大学の学生にとってより有意義なものになるのか、筆者としては明快な答えが出せないまま試行錯誤のうちに任期を終えた次第である。

4. 派遣準備及び現地での生活

本節では交換教授の準備及び現地での生活について紹介する。その目的は、最初に述べたように、北海学園大学から交換教授としてこのプログラムに参加する人々に具体的な情報を提供することにある。従って、紙面の多くは北海学園大学からレスブリッジ大学へ派遣される時の準備と現地の生活についての説明にさかれている。

レスブリッジ大学から北海学園大学への派遣については、交換教授の札幌での生活について紹介する。

4.1 北海学園大学からレスブリッジ大学へ

4.1.1 渡航までのスケジュール

渡航の前年秋頃に交換プログラム交換教授として承認を受けてから、準備が始まる。以下、渡航までのスケジュールを上野が派遣された2001年度を例に紹介する。そのスケジュールの中に、準備するもの、及び各期間に提出するものを含めた。また、詳細な記述、情報を資料6につけたので随時参照されたい。

渡航までの準備として大きなものは1) 講義アウトラインの送付、2) 就業ビザの申請、3)

航空券の予約である。

4.1.2 その他必要なこと

以下，項目のみを記す。詳細は資料 6 を参照のこと。

1) 出張中の郵送物管理，2) 出張中の北海学園大の電子メール管理，3) おみやげの用意，4) レスブリッジ大学長に記念品，5) 学長に出発の挨拶，6) 出発時の空港からの連絡。

4.1.3 レスブリッジ到着，現地での生活

バンクーバーでカルガリー行きに乗り換えロッキー山脈を越える。カルガリー時間はバンクーバー時間より 1 時間早くなっている。自分の時計の時間を 1 時間進め，乗り継ぎ時間に注意しなくてはならない。

カルガリーからレスブリッジまではとてもおそろしい，しかし安全な一列 9 人，計 18 人乗りのプロペラ飛行機に乗ることになる。街はずれの空港には 20 数名程の人々が出迎えてくれる。学長秘書，インターナショナルセンター担当職員，日系コミュニティーの人々，以前に札幌に来た交換教授の先生達多数が待っていて驚いた。レスブリッジ到着から帰国までのスケジュールは以下の通りであった。学年歴については <http://uleth.ca/> の Calendars and Timetables を参照されたい。

表 2：渡航までのスケジュール（主な準備と提出物）

2000 年 12 月	交換プログラム派遣教授として承認される。
2001 年 2 月	レスブリッジ大学学長から招請状が届く。
2 月	インターナショナルセンターの担当職員より授業期間，日給 50 カナダドル等雇用待遇の詳細，通訳は必要か，講義が始まる数日前に来るように等の情報と講義アウトラインを送れという内容の手紙が届く。
2～3 月	講義アウトラインをレスブリッジ大学に送付。これが大学の講義概要に載る。
4～7 月	カナダ大使館に就業ビザ（査証）の申請をする。 家族を同伴する時は家族の分も申請が必要。就学児童を同伴し現地の小，中学校に入れる場合は学生ビザ（Student Authorization）が必要。
	航空券の手配。
	荷物を郵送。
	レスブリッジ大学に提出するもの。インターナショナルセンター宛 1) カナダ到着日時，帰国の日程 2) 旅行傷害保険の番号 3) Tax Waiver Form（私はカナダ滞在中〇〇ドル以上の収入は得ませんという誓約書）
	北海学園大学に提出するもの 1) 在外研修・海外出張手続き
	授業の準備 講義の準備に役立つ参考文献とウェブサイトは資料 6 参照。

4.1.4 生活の準備

到着の翌日から授業が始まるまでは、以下のような生活の準備が必要であった。詳細は資料6を参照されたい。

1) 担当職員との打ち合わせ

インターナショナルセンターにて担当職員と事務打ち合わせをする。宿舍と研究室は2001年度は8月26日より入居できた。翌週レスブリッジ大学学長と面会、9月中旬のレセプションの日程等が伝えられる。その他、研究室と宿舍の鍵、e-mail address、自宅住所、電話番号、研究室電話番号、コピーカードをもらう。電話は市外通話分は自分で支払う。

2) 身分証明書作成

クレジットカード大のカードでFacultyの文字と写真がついている。これで図書館で文献、ビデオの借り出し、スポーツ施設の利用等すべてできる。

3) 銀行口座

大学の近くの銀行で口座を開く。パスポート、写真入り身分証明書、住所、電話番号、旅費支払いの小切手、等を持参する。

4) 就学児童

小学校への転入は、15th StreetにあるEducational Board of District 51(教育委員会)に向き、パスポートおよび学生許可証を提示し、転入に必要な書類をもらう。その後、小学校を訪れRegistrationする。レスブリッジでは小・中学校に学区制はなく、大学のように学期開始前の週に通学したい学校で登録手続きをするようだ。自宅より離れた学校に通う場合は毎朝市営の通学バスが迎えにきてくれる。

5) 時差

日本とレスブリッジの時差は16時間ある。4月から10月末まではサマータイムを実施するの

表3: レスブリッジ大学での滞在日程 (2001年度)

2001年8月26日	レスブリッジ空港到着 宿舍入居
9月6日	授業開始
9月11日	Faculty Picnic (新人教授として紹介される)
9月13日	Welcome Reception (インターナショナルセンター主催。学長、副学長出席。スピーチをする。プレゼント交換)
9月25日	Faculty Party 7:00 pm 新入教員の紹介があった
11月13日	Convocation (卒業式。ガウンを着てFacultyとして参加する)
12月10日	期末試験
12月13日	秋学期終了
12月17日	成績提出
12月18日	雇用契約終了、送別会。学長、副学長出席
2001年12月21日	レスブリッジ出発

で15時間となる。10月最後の日曜日深夜にサマータイムは解除される。

4.1.5 仕事の環境・待遇

交換教授の研究室は、University Hall という大学の中心的な建物にある。インターナショナルセンターや授業で使う教室からはかなり離れている。教室へは Fine Arts Building を通り、図書館を抜け、Tunnel と呼ばれている地下の長い廊下を通して外に出ないで行くことができる。10分ほどかかる。キャンパスに穴を掘って生息する Ground Hog になったような気持ちがする。

研究室は3畳程度の広さの部屋で、コンピュータ（Windows 98）とカラープリンターが設置されている。研究室のパソコンで前任者が作成したファイル等はすべて消去されている。レスブリッジ大学は基本的に Windows と Netscape の世界である。

研究室の本棚には歴代の交換教授の配布資料、雑誌、本などが残されている。

電話は学内及び市内は無料で使用できる。ファックスはインターナショナルセンターの職員に頼むと無料で送信してくれる。研究室と同じフロアにコピー室があり、コピー機と印刷機が使用できる。なお、当地では在室中はドアを少し開けておくのが習慣になっている。

授業のハンドアウトについては、インターナショナルセンターの担当者に前日までに頼んでおき、授業前に担当者のところへ取りに行く。カラーコピーは、学内のコピーセンターまで行かなければならない。教材でカラーコピーが必要な場合は、インターナショナルセンターの担当者に頼むか、担当者から伝票を書いてもらって自分でコピーセンターへ行く。なお、レスブリッジ大学は学内のコンピュータ化が進んでおり、学生からの欠席連絡や教務関係の連絡もメールで来るほか、大学図書館の書籍や学内の教職員の連絡先なども研究室でコンピュータで検索できる。教員からクラスの学生全員に連絡をするためのメーリングリストも教育用コンピュータ支援室で履

表4：レスブリッジ大学交換教授研究室所蔵資料

1	代表的な日本建築の写真
2	阪神大震災の写真
3	高校歴史教科書・参考書
4	日本—その心と姿—（ビデオテープ）2本
5	日本のテレビニュース，教養番組，ドラマ番組（ビデオテープ多数）
6	データブック：日本文化と社会
7	今までに使用した OHP シート多数
8	過去の授業用資料（数年分）
9	札幌雪祭り（スライド）
10	Power Point 提示教材（お正月，休日，若者文化，日本食，伝統芸能について）が学内の共有サーバーに入っている。（2001年春，北見キャンパスより派遣された教員作成。研究室のパソコンよりアクセスする。「My computer」「学内共有ファイル」「授業又はclass」「IDST 2008 A」を開ける。）

修者が決定するとすぐに作成している。アドレスも簡単で、科目名を利用している。(例: idst2008a@uleth.ca) このアドレスに連絡事項, 例えば「本日午後8時のこの番組は日本について特集するから見る。木曜日にディスカッションする」というような内容を送信すると, クラス全員にメールが届くことになる。

交換教授に関わる学内での行事は歓迎会と送別会で, これもインターナショナルセンターの担当者の仕事になっている。歓迎会は着任2週間後くらいに, 学長夫妻や関係者, 過去の交換教授などが参加し, 学内のロビーでワインとスナック程度で簡単に行われる。交換教授のスピーチ及び学長とプレゼントの交換がある。送別会は学外の日本食レストランなどで十数名の規模で行う。インターナショナルセンターの担当者が, 招待客や会場などについて交換教授の希望を聞き準備をする。費用もインターナショナルセンターが負担する。その他に, 全学の新任教員歓迎のためのバーベキュー・ピクニックに誘われる。また, コーディネーターや元交換教授らが, ボランティアで個人的に旅行, ドライブなどに誘ってくれる。従って春学期に北海学園大学にきた交換教授のコーディネイターをつとめて, 顔見知りになっておくことと当地での授業の仕方, シラバスの書き方について情報が得られる。また, レスブリッジ到着後のいろいろな助言も受けることができる。

北海学園大学では1泊程度の視察旅行を公費で組んでいるが, レスブリッジ大学側ではそのような対応は行っていないし, 予算はない。

4.1.6 図書館

2001年11月, University Hall とインターナショナルセンターの間に地上3階, 地下1階の図書館が完成した。この図書館は北米の大学の所蔵図書が検索できるシステムを持っている。オープニングセレモニーとお披露目は地元の人々も招いて1週間盛大に行われた。大学で利用する図書の他に, 教育学部学生の実習用に子供向け図書コーナーもある。絵本, 児童書のコレクションも充実している。学生が資料を調べレポートを書けるパソコンブースも多数設置されている。また, 5, 6名のグループで学習したり, 資料を調べディスカッションできる個室もいくつか用意されている。

図書館オープンの記念に北海学園理事長より寄贈された, 日英対訳の講談社文庫が入り口に展示された。この寄贈については学内新聞でも取り上げられた。

レファレンスセクションには「英文日本大辞典」など日本文化関係の参考資料が少しある。2階のメディアセンターには「日本—その姿と心—」が全巻揃っている。日本語の新聞はない。

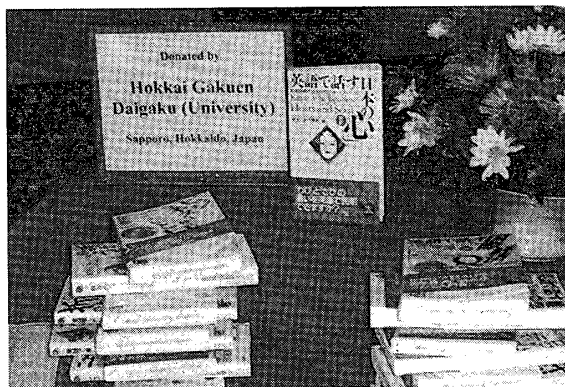


図8: 北海学園より寄贈された文庫本

4.1.7 宿舎

宿舎は大学の家族用のアパートメント 19 号である。1 階部分は玄関となり，階段を上がると居間とキッチンがある。3 階部分にふたつの寝室とバスルームがある。寝室はひとつにダブルベット，もう一つにツインベットが入っている。毛布，タオル，石鹸，シャンプー等，当面の生活に必要なものはすべて揃っている。

その他，宿舎にある備品は，電子レンジ，フルオープン，炊飯器，コーヒーメーカー，Wok（鍋料理用），冷蔵庫，掃除機，和洋食器，加湿器，ビデオ，テレビ（ケーブルテレビは接続していない）等である。洗濯はアパート隣に共同のスペースがあり，そこにコインランドリーの洗濯機と乾燥機がある。使用料は洗濯が 1 カナダドル，乾燥が 75 セントである。到着後数日間の食料は大学で用意してくれる。壁には大学の美術館から借りてきた額絵が飾られている。日本の風景を題材にしたカナダ作家の作品もある。

宿舎には歴代の交換教授が残した文房具が多数残っている。カラーペン，OHP 用トランスペアレんシー用ペン，フェルトペン，ボールペン，色鉛筆は持参する必要はない。文房具はどうしても必要なものだけ持参すればよい。その外，ファックス，体重計，カラープリンタもある。

日本語の情報がどうしてもほしい場合は，インターネット上にある各新聞社の新聞サイト，インターネットテレビを利用するとよい。NHK，TBS，STV など毎日のニュースを配信している。STV のカメラで同時刻の札幌の空の様子も見ることができる。

4.1.8 気候・服装・その他

1) 気候・服装

9 月末まで暑いので，夏服は必要である。その後，徐々に寒くなるが，十分暖房しているので室内は快適である。しかし冬は乾燥がひどい。初雪は 10 月。雪はそれほど積もらない。平野ではあるが，海拔 1,000 メートルの高地なので木々は樹氷で覆われる。足首が隠れるくらい雪が積もっても，翌日はシノックというフェーン現象が起こす南風が吹いてすべて融かしてしまう。従って道路に雪が残っていることはない。12 月は外を歩く短時間だけ，マイナス 10～20 度の気温に対応するコート

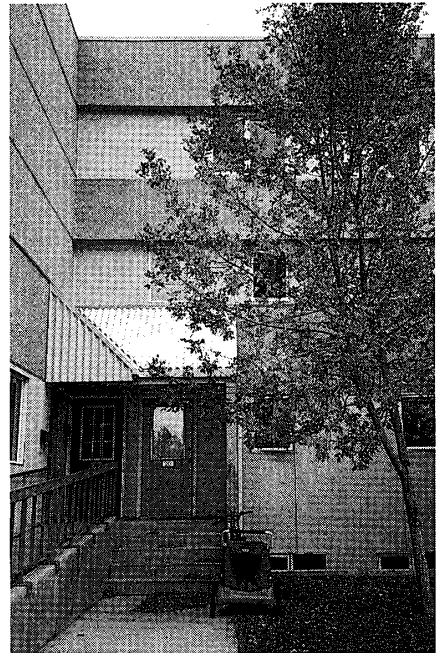


図 9：アパートメント 19 号外部

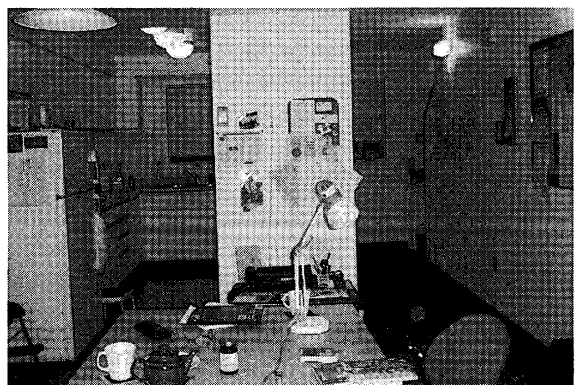


図 10：アパートメント 19 号内部：左側がキッチン，右側奥がベッドルームに通じる階段

が必要である。風が強いので現地の人々は皆、風を通さないものを着ている。

2) 車

車は交換プログラムでは付いていない。日常の買い物が少々不便である。バスは結構便がよい。回数券は学内キオスクで販売している。

3) 日本食

創業40年のナカガマ商店に味噌、醤油、納豆、すし酢、カレー粉、うどん、米、自家製豆腐、油揚げ、いくら、刺し身のねた、ポッキー、お多福ソース等なんでもそろっている。表示が英語でなければカナダにいることを忘れる。送料を考えると、日本から送るよりこちらで調達した方がよい。昔ながらの製法で作る豆腐と油揚げはおいしい。

4.1.9 日系人の協力

レスブリッジの生活にかかせないのは日系人の人々の協力である。学内に関してはインターナショナルセンターがお世話をしてくれるが、日常生活や街の情報は日系コミュニティから得るのが早い。それぞれ各方面で活躍している素晴らしい人々である。日本では知る機会が少ない移民の歴史、カナダの日系社会について、その生き方に学ぶことも多い。

4.2 レスブリッジ大学から北海学園大学へ

4.2.1 札幌での生活・視察旅行・待遇

レスブリッジ大学から札幌に着任する交換教授は大学のゲストハウスを宿舎としている。宿舎は2階建てで、2階はレスブリッジ・コミュニティ・カレッジ(LCC)と北海高校と札幌商業高校の交換プログラムで赴任している教員が住み、1階を大学の交換教授が使用している。居間、キッチン、バスルーム、畳の部屋、2寝室からなる。居間にはテレビ、ビデオがありNHK衛星放送を受信している。その他、洗濯機、乾燥機、電子レンジオーブン、炊飯器などがある。宿舎にはIBMパソコンがありインターネットに接続している。自宅用のメールアドレスもあるが、たいていの交換教授はレスブリッジ大学のアドレスを続けて使用している。

旅費は本人には正規の航空運賃で支払われる。配偶者の旅費は3分の1が北海学園大学負担となっている。子供の旅費はでない。月37万円の給与が支払われる。

札幌滞在期間中、1泊の視察旅行の予算もある。日本語が全くできない交換教授にはこの視察旅行のための引率が必要となる。引率はこの交流プログラムに貢献する気持ちのある教員が担当している。

北海学園では庶務課の中の国際交流係が到着からお世話をしている。子供の学校の手配もする。小学生は近くの旭小学校に通うことが多い。高校生は北海高校に通学できる。市内のインターナショナルスクールに通学させる方法もある。

札幌で行われる大学での歓迎会は学長主催である。カナダ・コース小委員会委員長と委員、ク

ラスでコーディネイターをつとめる各教員が出席する。送別会はカナダ・コース小委員会委員長が主催し，コーディネイターとカナダ・コース委員が出席する。

札幌での生活については歴代の交換教授が書き残した 31 ページにおよぶマニュアルがある。北海学園大学の名前の由来から始まり，交流プログラムの目的，クラスの準備について，出席カードおよび試験のマークカードの説明，各教室の AV 機器の操作方法，研究室の写真，所蔵資料リスト，

大学の写真，学内地図，ゲストハウスの写真，電気系統について，電気機器の操作方法，各公共交通機関の利用のし方，観光ガイドなど細かな記載がある。

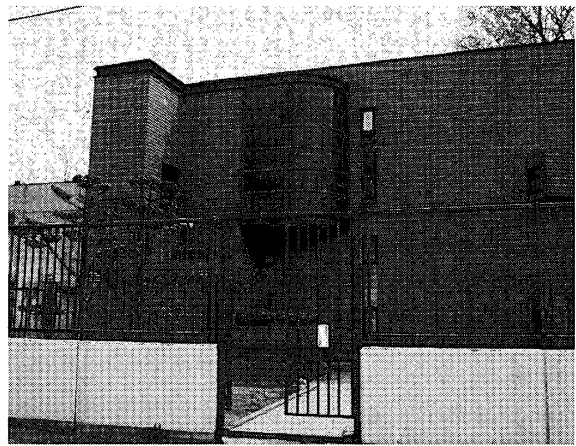


図 11：ゲストハウス玄関

5. 今後の課題

レスブリッジ大学との交流は，レスブリッジ大学及び北海学園大学の双方の学生に，カナダ及び日本の文化や生活について学ぶ機会を与えるとともに，第 6 章の経験者の感想にもあるように，派遣される教員やその家族に対しても，異なる文化の中に身を置いて生活するという貴重な機会を与えてきた。レスブリッジ大学には，北海学園大学での経験を通して「親日家」となり日本の文化に関心を持ち続けている元交換教授も少なくない。そうした成果の一方で，プログラムの今後の発展のために検討すべき事柄もある。本章では，レスブリッジ大学と教員交流の学内の体制及び交換教授によるカナダ・コースの運営に関する今後の課題について述べたい。

5.1 交流プログラムに関する学内の体制

第一に，レスブリッジ大学との交流が始まった当初の状況に比べ，学内の国際交流をめぐる状況は大きく変化しつつある。ここ数年の間に，ロシア，中国，韓国などの大学との交流協定が次々と締結され，1999 年度に始まった大田大学からの交換学生，2003 年度からのシベリア交通大学からの短期留学生をはじめとして，レスブリッジ大学以外の大学からの交換留学生の受入れや教員の交流も広がってきている。2003 年 4 月現在，大学の国際交流委員会の下に，レスブリッジ大学委員会に加え，ロシア協定校委員会，韓国協定校委員会，中国協定校委員会が設置されている。今後，海外の大学からの教員や学生の受け入れがさらに拡大することが予想されることから，レスブリッジ大学との交流を含めて，教員交流や学生交流に関する共通のガイドライン作りが必要になってくるのではないだろうか。

レスブリッジ大学との交流は，北海学園における最初の本格的な交流プログラムということもあって，交換教授及び交換学生に対し法人からの手厚い配慮が行われてきた。例えば交換教授と

その家族に対しては札幌近郊への旅行の招待, 交換学生に対しては10日程度の短期間の滞在中に学内での歓迎昼食会, 理事長宅でのガーデン・パーティ, ホームステイの家族を交えたホテルでの送別パーティなどが行われている。レスブリッジ大学との交流のような法人を主体とした交流と, 大学単位での交流とは共通の枠組みでとらえにくい面もあると思うが, 今後の国際交流の広がりを見ると, どの交流対象に対しても平等でバランスのとれた対応をするように, 大学としての共通の方針を考えていく時期にきているのではないかと思う。

第二に, レスブリッジ大学に派遣される教員への情報提供の問題がある。現在, 国際交流委員会は派遣する教員の人選のみを行い, 実際の派遣先での業務や生活に関しては, 新たに派遣される教員が, 個人で一から情報集めをしている状態である。交換教授が決まるたびに, こうしたことが繰り返されている。また, 交流に関心がある教員がいても, 応募を検討するための情報がどこにもない。少なくとも, レスブリッジ大学でのこれまでの教員の講義概要や資料, レスブリッジ大学との教員交流の合意事項, 現地の生活についての情報などをファイルし, だれでも見られるようにしておく必要があるのではないだろうか。また, 交換教授の帰国後の報告会を定例化することも交流の現状を把握するうえで有効であろう。本稿もそうした情報提供の一部となることを目指して取り組んだものであるが, 今後も新しい情報を加え, 交換教授に提供できるようにすることが望ましい。先にも述べたように, レスブリッジ大学との交流については, 国際交流委員会, レスブリッジ大学委員会, 共通教育委員会のカナダ・コース小委員会など学内の複数の組織が関わっている。ここで取り上げた情報提供の態勢作りをどこが担当し, どこで情報を管理することが望ましいのか, 関係機関での検討が望まれる。

第三に, レスブリッジ大学からの交換教授への対応についても改善の余地があるだろう。現在, レスブリッジ大学からの交換教授の受入れに関して, 各教授会で簡単な報告はされているものの, 学内でその存在が認知されにくい。以前に教養部があった頃は, 交換教授は教養部に配置され, 教養部の教授会での紹介や教養部懇親会への参加など教員との交流の機会もあったが, 現在では限られた関係者としてしか接触の機会がない。交換教授の専門分野に関して話を聞くとか, ゼミのゲストスピーカーとして招くとかの交流もあまり行われていない。今回(2003年度4月), カナダ・コースの担当者がレスブリッジ大学からの交換教授の紹介文を関係者に配布したが, そうした形で全学の教員に交換教授のプロフィールを知らせることも一つの方法であろう。また, 学内の交換教授経験者, 外国人教員を含めだれもが気軽に参加できるような歓迎の機会を学内で設けてもよいのではないだろうか。飲み物とスナックだけの簡単なものなら, 経費もそれほどかからない。ちなみに, レスブリッジ大学では, 4.1.5でも述べたように北海学園大学からの交換教授の歓迎会が, 学内のロビーでだれもが参加できる気軽な形で行われており, 元交換教授や学外の日系人の協力者などとその場で顔見知りになることができる。

最後に, 最近の新しい動きとしてレスブリッジ大学及び北海学園大学の交換教授経験者のメーリングリストの作成が挙げられる。これは, 2002年9月の西沢悟元北海学園大学教授(1988年度

交換教授）の逝去をきっかけにして、元交換教授の一人で西沢元教授と親しく交流のあったマーク・サンディランズ（Mark L. Sandilands）レスブリッジ大学元教授などによって立ち上げられたものである。なお、レスブリッジ大学では同年10月、サンディランズ元教授などの呼び掛けにより、西沢元教授を偲び北海学園との交流について語る会が持たれている。メーリングリストという形で、両大学の教員による直接の情報交換の場ができたことは画期的なことであり、今後の活用を期待したい。

5.2 北海学園大学カナダ・コース授業の課題

レスブリッジ大学からの交換教授が行う授業（「カナダの自然と社会Ⅰ，Ⅱ」）およびそれを支援する体制は、個人レベルでの献身的な努力もあって、なんとかうまく機能し続けているようである。しかし、3.1で少し述べたように、そこにはまだ次のような解決すべき課題があると考えられる。

1) カナダ・コース小委員会内部での引き継ぎ

小委員会は、共通教育委員の中から選ばれた委員長と委員長の委嘱した委員で構成される。委員長と委員の任期は1年である。カナダ・コース授業について詳しい人が委員長になるとは限らないこと、および任期が1年と短いことにより、委員会は最低限行わねばならない業務のみを行うようになりがちである。その結果、カナダ・コース授業の抱える問題点を整理・解決することのないまま、次年度委員会へ不十分な情報を引き継ぐことになっている。

2) 授業や業務についての文書化

カナダ・コース授業は個人レベルでの継続性を持ち得ない。交換教授は学期毎に異なり、委員は毎年交替し、コーディネータにも毎年新しい人が入ってくる。このような状況の下で継続性を保つには、授業や業務についての詳細な文書化が必要なはずであるが、これまでそのようなことはほとんどなされてこなかった。例えば、授業・試験・成績評価等についてのガイドラインを交換教授に対して説明する文書“Canadian Studies Course Teaching Guidelines”（資料2参照）がつくられたのはようやく2002年度の終わりのことである。コーディネータ用のマニュアルなど、まだ手のつけられていない部分についての文書化を早急に進める必要がある。

3) コーディネータの負担の軽減

コーディネータは授業を円滑に運営する上でなくてはならない存在であるが、その名前が時間割やシラバスに載ることはない。また、コーディネータの担当する授業はその教員のノルマには原則としては数えられない。わずかに、持ち時間外手当が1講分支払われるだけである。このように、コーディネータは、あくまでもボランティアとして授業に協力する黒子のような存在であり、その意見がカナダ・コース小委員会に届くこともほとんどなかったようである。正規の授業の運営が協力者の大きな負担の上に成り立っているのはシステムとして不健全なので、コーディネータの負担を合理的な範囲にまで減らすことが考えられなければならない。

2002年度には、交換教授の仕事とコーディネータの仕事が文書により明確に区分され、さらに、それまでコーディネータが行うことになっていた成績転記作業を交換教授が行うことになった。これにより、コーディネータの負担はある程度の軽減されたようである。しかし、まだコーディネータのためのマニュアルが作られていないことが、初めてコーディネータをやる人に精神的な負担や不安を与えている。事情がわからないため、試験や成績評価などに関して学生から質問されても答えられないことが多いからである。コーディネータに余分な負担をかけないために、各学期のスケジュールや授業・試験・成績評価に関する詳細なマニュアルの作成が急務である。

4) 英語版の出席簿と採点表の作成

現行の出席簿と採点表は日本語表記なので、交換教授にとっては、学生番号のみが学生を同定する手がかりとなる。この状況は、学生に対する評価が場合によっては進級・卒業を決定することになるだけに、はなはだ危険である。学生が試験時に使われるマークカードに自分の学生番号を間違えてマークするということは、しばしば起こることである。また、間違えてマークした学生番号が、たまたま、試験に欠席していた学生のものであるということも起こりうる。そのような場合には、当該学生は欠席として処理され、欠席した学生が得点することになる。このようなことが起こる可能性は低いので気にする必要はないと思われるかもしれない。しかし、これは、2002年度に実際に起こったことである。この件は、学生からの問い合わせがあったために発見できたが、問い合わせがなければ見逃されていただろう。

この例以外にも、交換教授が学生氏名を読めないことによる成績評価ミスがしばしば起こっている。それらは、学生からの成績の問い合わせの結果、間違いが判明するという形をとるので、他にも間違いがあったのではないかという疑念がつきまとう。明らかに、現行のカナダ・コース授業の成績評価システムには欠陥がある。

このような欠陥を是正するには、コーディネータが成績処理を全部行うか、あるいは、英語版の出席簿と採点表を作成し、交換教授に学生氏名が読めるようにする必要があるだろう。前者は、コーディネータに過剰な負荷を課すことになるし、成績評価の責任が本来交換教授にあることを考えれば、望ましい方策ではない。したがって、後者の方策が望ましいということになるが、それには教務事務システムの変更が必要となるので、まだ実現のめどはたっていない。英語版の出席簿と採点表の作成に向けて努力するとともに、実現までの期間にどのように対処するかも考える必要がある。

5) 授業の方式

3.1で述べたように、交換教授のノルマは週4講の授業を担当することである。その方式として最善のものを見いだすことは難しい。同一講義を4回も同じ緊張感を持って行うのはほとんど不可能なので、できれば同一講義は最大でも3回にし、残りは他の形式の授業にしたいところである。交換教授が学生とふれあう機会を持つことができるという点ではセミナーを担当するのが最善であると思われるが、残念ながら現行のカリキュラムには全学はおろか学部をまたがったセミ

ナーもない。カナダ・コース小委員会では、次善の策として、全学対象のセミナーに最も近い形態の科目である「英語・文化演習 I，II」（2 年次以降の学生対象）を交換教授に担当してもらう可能性が検討され始めている。この可能性も含め、検討を要する課題である。

6. 教員交換プログラム参加者の感想

6.1 北海学園大学での授業について—レネ・ブーレ レスブリッジ大学教授

私は 2002 年 9 月 9 日に札幌に着任し、その第 2 学期に「カナダ・コース（2 単位）」を北海学園大学（札幌校）で教えた。この科目は 80 年代始めよりレスブリッジ大学（カナダ，アルバータ州）との日本—カナダ文化教育交流の一環として始まった。着任前に、レスブリッジ大学に以前赴任した交換教授達にいろいろ話は聞いていたが、私は自分が何をするかぼんやりとしたイメージしか持っていなかった。カナダについて教えるというのは私の専門である化学とはかけ離れたものだった。すでにこの時点で私は自分の個人的な知識に基づくカナダの自然と歴史を教えようとしていた。しかし、心にあったのはこれだけで、具体的にどうするか全てが白紙の状態だった。

北海学園大学は国際教育と外国語教育の分野で幅広いプログラムを持っていた。これは私にとって幸いであった。というのは、レスブリッジからの交換教授は日本語がほとんどできない。大学の授業を日本語で行うなど問題外であった。しかし、北海学園大学は交換教授に英語で講義をし、英語による試験をすることを認めていた。カナダ・コースは全学部が開講され、1 年，2 年生が主に履修している。彼らの英語の運用能力は問われない。そのような学生と交換教授を補助するために、それぞれのクラスには「コーディネイター」として日本人の教員がついている。彼らは授業を逐語通訳する。「レスブリッジ大学からの交換教授はカナダ社会，歴史，文化と地理についての講義をする」と教授要目には記されている。

私の仕事は「カナダ・コース」4 クラスを教えることであった。クラスの受講人数は 25 名から 250 名と様々だった。各クラス 90 分，1 週間に 1 度の講義を 12～13 回行った。札幌に来て、カナダ人の常勤教授 Jane Sellwood 先生がいることを知った。彼女は上級年次でカナダの文化と文学を講じていた。それでは私の存在は何なのか、と担当委員会に聞いてみたところ以下のような答えが返ってきた。「学生達にとってあなたはカナダそのもののなのです。カナダの代表なのです。」全くなんということだ。このように私は化学以外に教えたことはほとんどないにもかかわらず、自由に教える事ができる立場にいたのだった。しかし、最初の数週間は何を教えるべきか限界を感じたのも事実である。私が出した答えをここで披露し、それが後に続く交換教授の役に少しでも立つなら光栄である。

1 週間に一度 90 分の授業がある、というのが日本のシステムの標準だが、これは北米の 3 単位コースと異なるものである。レスブリッジ大学では、50 分授業を 1 週間に 3 回するか、75 分授業

を2回するかのどちらかである。私は1時間以上の授業の経験はあったが、90分はたいへん長いものだった。特に外国語で翻訳で講義を聞かなければならない学生にとっては長いのではないかと思う。そこで私が行ったのはある種の気晴らしをクラスに与えることであった。主にスライドショーやビデオを1ユニット見せることことにした。90分間続けて休みなしに講義をしても到底受け入れられないと考えたからだ。

日本のシステムでは北米の大学で3単位クラスを1学期に5科目受講するより週1回のクラスをもっと多く受講するようになっている。それに伴い、学生が課外で予習と復習に費やす時間を考慮にいれなければならない。それで私は実際には、テストの前に配布した Study Questions の答えを考えることぐらいしか要求しなかった。

授業時間もレスブリッジ大での授業の半分と考えていたが、通訳の時間を考慮に入れると、毎週私が講義できる量はレスブリッジ大での50分の講義とほぼ同じであることに気がついた。そうすると講義の内容はレスブリッジ大の約3分の1又はそれ未満となる。それで私は講義内容を縮小し、たくさんのトピックを浅く教えるよりは、少ないトピックをより完全に教えることにした。幸運にもレスブリッジ大では全く不可能である講義内容変更が北海学園大学では許された。

必ずしなければならないことのひとつに、各講義のレジュメを少なくとも1週間前に用意することがある。1講義につき3,600語くらいが適当と思う。AV教材を使用する時は3,000語くらいが適当だろう。10から12クラス分3,000語の内容は合計すると3万語から32,000語となり、どのくらいの内容がこの量で教えられるかがはっきりする。

コーディネイターの英語運用能力には差がある。ある人は、堪能で私が何を言ってもすぐ通訳する能力があった。また、ある人は前もって翻訳準備をする必要があった。結果としてそれぞれのコーディネイターと私の打ち合わせによりクラスの雰囲気も変わった。総じて、コーディネイターと学生のためにレジュメに書いている以外のことを言うのは極力控えるようになった。

ほとんどすべての日本人学生は何年も学校で英語を学習してきている。大学に入学後も引き続き学習しているが、英語専攻の学生や英語が好きな学生、語学が得意な学生以外は、彼らの英語理解力は限られている。それは英語系 (Anglophone) カナダ人がフランス語系の学校で勉学する場合と同じである。それはあたかもフランス語しか話さない私自身がレスブリッジ大学でフランス語で教鞭をとるようなものである。そのクラスは様々な学生によって受講され、フランス語専門の学生はよくできるだろうが、大部分の学生は今まで公教育で受けてきたフランス語にたよるざるを得ないだろう。このように考えると、私は単位のために言語の壁を乗り越えて私のクラスを受講している学生のことは理解できたし、授業を行う上で参考になった。

多くの学生が純粋な興味を持ってこの授業を取っている一方で、また多くの学生が単位を簡単に取れる科目であることを期待して取っていると思った。北海学園大学の基準は高いのでクラスの20%は途中で消えるか試験で落ちる。だからある種の緊張感もあったのは確かである。一番たいへんだったことは試験の難易度を決めることと学生にどのくらいの勉強をさせたらよいか把握

することであった。

講義形式がこのクラスで唯一の授業形式であると思った。小クラスであれば、学生との対話を通して教えることもできるであろうが、大クラスでは全く不可能であった。実際に私は2つの異なった科目を教えるために授業の準備をすることはとてもたいへんでできなかった。そこで私は比較的小規模なクラスも大クラスも大体同じように教えるしかなかった。加えて、学生と対話形式の授業を行うことが不可能であることも発見した。これは日本の教室の文化的背景に起因するのと、他の学生の前でどんな英語であれ英語を使って話すのは困惑を引き起こす原因となったからだ。また反対に授業を離れると1対1であれば簡単な会話をすることはできた。

400名以上の学生を実際に限られた時間内に評価する唯一の方法は多肢選択形式のテストと成績評価の自動化であった。そのためテストはあいまいさのない非常にはっきりとした質問を作ることに苦心した。授業での教材をしっかりと復習していれば正解をみつけることができる問題を作成した。テストの問題はすべて事前に配布した Study Questions から出題した。テスト結果を統計的に分析し、テストからランダムな結果があるすべての問題を削除した。上位70%の学生の成績と比較し、成績上位の学生がまちがっている問題も除外した。実際に複数のテストでこのような問題を削除した。

学生は試験準備のために講義のまとめ、及びレジュメが必要だった。私はレジュメの中に重要語、説明が必要な語（例えば、辞書で調べてもはっきり意味を理解するのが難しい語）のリストをつけて配布した。その他に、講義の内容を理解するのに必要な図や地図も載せた。配布物を何枚も印刷して渡すのは簡単なことだが、何ページくらいの文章なら外国語で読むことができるか、詳細を勉強することができるか、自問自答した。基本的には講義原稿以上の追加の読む課題は出さなかった。

口頭で行う講義の補足として各クラスでは、パワーポイントを使用したプレゼンテーションを実施した。そのために、写真、図、及び地図を駆使して講義の説明がわかってもらえるよう努力した。私の授業の資料の多くは歴史、地理に関するものであったので、インターネットから地図、図、写真を引用した。私は同様に日本にくる前にカナダ国内で撮影した個人的な多くの写真を自分のパソコンに読み込んでおいた。これはたいへん役に立った。カナダ国内の旅行や休暇等個人的に精通している事柄を可能な限り講義に利用できたので助かった。

レジュメを書くときは、できるだけ簡潔に明確に書くことを心がけたが、それは容易なことではなかった。毎回それがうまくいったとは思わない。時には時間が足りなくて訂正し、言語レベルをうまくあわせることができなかった。コーディネーターに渡す前に、有能な英語の編集機能（page-editor）を使って書いたものを推敲できたならよかったと思った。そのようなものはないので実際に私にできたことは手元で活用できるものを使うことだった。そこで、講義の長さを測るため、ワープロソフトの統計機能を利用し、語と文字数の比率を計算した。この比率を 4.6 ± 0.2 とし、これを守るよう努めた。これより低くなると Saskatchewan のような長い単語をたくさん与

えることは難しくなるし、比率が高くなると口頭で講義を行う時に不必要な複雑な語を知らず知らず使っているということになる。

この報告では、北海学園大学における私の短い滞在期間中に私が感じた「カナダ・コース」を教える時の制約についてまとめた。それがもっとも重要だと感じたからだ。私自身が本物の異文化コミュニケーションに直面し少しは成功したと考えたい。また、受講生の何人かはカナダの歴史と地理について効果的に学んでくれたことを期待している。私自身はといえば、自分の国について多くのことを学び、知識も豊富になった。もちろん、全く異なったそして魅力的な文化の中での生活を経験し、学内外で多くの友人を得た。この友情が今後長く続くよう願っている。

(上野之江 訳, 原文は資料5参照)

6.2 レスブリッジ大学交流の思い出—佐藤克廣 北海学園大学法学部教授

[はじめに]

1987年8月末、私と家族(妻、6歳、4歳、7ヶ月の息子たち)はロサンゼルス経由でカルガリー空港に降り立った。その年の6月に交換学生プログラムで北海学園大学を訪問していた学生の一人が出迎えており、約3時間ほどのドライブでレスブリッジ市入りした。滞在は、同年12月末までのわずか4ヶ月である。

[授業]

私に割り当てられた授業は、日本コースのオムニバス授業中の日本の歴史部分、週2回の日本語コースでの初級日本語、それに時々2、3の先生から誘われて各先生の演習中一コマ程度に出講し日本を紹介するというものであった。

日本の歴史については、通史的に簡単な紹介を行った程度である。そもそも日本史に詳しくない私が英語で授業を行うというのであるからかなり乱暴な話ではあった。よく言われるように学生の授業参加意欲は高く必ず質問があった。中でも印象に残っている質問を二つ紹介したい。

一つは、源頼朝、平清盛、足利尊氏、織田信長といった日本人にはなじみの名前に関連した質問であった。前二者については、姓と名のあいだに「の」を入れて読む、後者二人については「の」が抜けている。この「の」は何か、それがどうして抜けることになったのか、という質問である。〈そんなこと習った覚えはないぞ、さて困った。〉というのが本音である。しかし、受験戦争で鍛えられた私は、瞬間芸的にいい加減な答えを考えつくのは得意である。そういうときに思いついた答えは、忘れないものであるが、恥ずかしいのでここでは書かない。日本に帰ってからある先生に尋ねたところ、まあそんなものでしょうといわれたからそうはずしてはいなかったのではないかと知っている。

もう一つの素朴だが強烈な質問は、豊臣秀吉の天下統一という話をしたときに出た。「豊臣秀吉が天下統一したとき、天皇をどうしたのか。豊臣秀吉はなぜ天皇を滅ぼさなかったのか。」と聞くのである。〈そんなこと聞くなよな。日本権力二重構造の謎じゃないかよ。〉というのが本音。こ

んな質問に「いい質問ですね。後で調べて正確なことをお答えします。」などといったところで、どうせ正確な回答は無理だし、本気で調べたらおそらくそのテーマで2，3冊本が書けるんじゃないかと思ったので、これもとりのあえずはいい加減な回答をしておいた。日本に帰ってからになり、しばらくして岩波新書で武家と天皇に関する本（今谷明『武家と天皇―王権をめぐる相剋―』1993年）が出たので読んでみたが、レスブリッジ大学の学生の質問にうまく答えられるようになったという自信はつかなかった。英語で「rule」とか「sovereign」というのと日本語の「支配する」、「統治する」、「天下統一」とは意味が違うんだらうなという感覚を学んだのが、私の収穫である。

これらの質問は、日本の学校教育ではこうした素朴な質問が封じられるのはどうしてかという「謎」を浮かび上がらせる。日本の学校では、先生が答えられないかもしれない質問はしてはいけないと陰に陽に教えられる。日本では、「先生」は「知識」を伝授する人であって、課題へのアプローチの仕方（方法論）、物事を考える際の基準点（思想）、考え方の道筋（論理）、つまりは「知恵」を伝授する人ではない、と親も生徒も先生も思っている。このことは、別にレスブリッジ大学に行ったから初めて気がついたことではない。そもそも、そういう日本の学校教育に反感を抱いて、学校の勉強は適当にお茶を濁してきたはずであったが、いざ素朴で本質を突いた質問を受けてみると、文句は言っていたけれど本気で何かを追究することはなかったことを改めて思い知ることにはなった。

[生活]

住居は、大学正門から少し離れた民間のアパートの一階であった。よく言えばきわめて行動的で活発な息子たちがいたので、二階や三階でなくてよかった。生活面でもいろいろおもしろいことに気がついたが、三つだけ言及する。

一つは、「時差」である。日本標準時の子午線は、日本の東西のほぼ中程に位置している。それに対し、カナダをはじめとする北米大陸では、各地の標準時子午線をその地域のもっとも東に位置するようにしている。したがって、日の出の時刻は遅くなるように設定されていて、太陽の動きから見ると北海道より早起きをしなければならない。到着した頃はまだ夏時間であったので、この時差は約2時間ほどあった。夏時間の時期だとレスブリッジのあたりで朝7時に起床するというのは、札幌では朝5時に起床するのに匹敵するわけである。東日本でしか暮らしたことのない私には新鮮な驚きであった。北海道は太陽の恵みを享受せざるを得ない農業を基幹産業とするといいいながら、日本標準時に合わせているのでは矛盾している。北海道こそ日本標準時より1時間早い時刻を採用すべきなのではないかと思いついた。ちなみに札幌は1月でも朝7時の外は明るくなっているが、那覇では1月では朝7時はまだ暗い。というわけで、レスブリッジからの帰国以来、自称「北海道に時差を作る会」会長であるが、会員は私と妻以外は今のところ道内某有名町役場の職員一人だけである。

二つ目は、「風速」である。日本の気象情報では、風速は秒速何メートルと表示される。一般大

衆に迎合しているはずのテレビや新聞でさえ「秒速」を使う。北米大陸諸国やヨーロッパでは風速は「時速」で表示される。少なくとも、マスメディアではそうである。レスブリッジではじめて「時速」表示の風速に出会って、こんなわかりやすいものをなぜ日本では使わないんだと思った。「時速」は自動車のスピードや電車の速さなどでふつうの人にもおなじみである。明日の風速は最大で時速70キロメートルになるでしょう、というのと、明日の風速は最大で(秒速)20メートルになるでしょう、というのとでは算数の計算がよっぽど速い人か、専門家でもなければ、前者の方がわかりやすいと私は思う。秒速より時速表示の方が整数表示では正確さに多少劣るが、正確さが必要な専門家は秒速表示を使えばよいのであって、時速70キロも時速72キロも同じだといふ一般人には、イメージしやすい時速表示の方が危機管理上好ましい。というわけで、レスブリッジからの帰国以来、自称「報道の風速表示を時速にする会」会長であるが、会員は私と妻以外は今のところいない。

三つ目は、「新聞」である。日本の新聞社は、独占禁止法上の再販価格制度を維持するいいわけに「日本では新聞を宅配しているという事情」をあげている。あたかも、他の国では新聞の戸別配達をしていないかのように思わせている。そう思ってレスブリッジに行ったら、早速アパートに新聞勧誘員が訪ねてきた。かわいい子連れだったのと、毎日買うより遥かに安かったのですぐ申し込んだ。朝の新聞配達人は、よくアメリカ映画に出てくるようにスケートボードにのった少年であった。アパートに入るにはいわゆるオートロック式で、部屋の鍵を使わないと玄関ドアが開かないし、さらに各部屋のドアにももちろん錠がついていた。新聞配達少年はおそらく玄関ドアをあけるキーを持っていて、部屋のドアの下の際間から毎朝新聞を差し込んでくれた。新聞は地元新聞である。当時たかだか人口6万人しかない市なのに、地元新聞があつて商売が成り立っているのである。しかも、日本の新聞よりぶ厚い。日本人はほとんどの家庭で新聞を読んでいて、文化水準が高いなどという物言いは、世界を知らない独りよがりの国粋主義である。日本こそ、人口数万人程度では、日刊の新聞社がほとんど成り立たない程度の文化しかない国なのである。しかも、金額の割には、地域情報の載らない薄っぺらい新聞が配達されるだけである。

[子連れ]

われわれは3人の子連れであった。しかも最年少はまだ1歳になっていない乳飲み子であった。子連れの海外旅行は大変だと思う人が多いかもしれない。それは、日本での子連れの移動のイメージがあるからであろう。少なくとも北米大陸諸国に関しては、子連れの海外旅行が大変なのは、日本を出国するまでである。われわれ夫婦はいずれもいい加減なので、物事は深く考えない。したがって、ひょいっと子連れで出かけてしまったが、拍子抜けするくらい楽であった。飛行機は先に乗せてくれるし、子連れとみるといろんな人が手をさしのべてくれるし、少なくとも夫婦にとっては楽であった。いきなり現地の学校に行かされた長男はストレス満載であったかと思うが。

レスブリッジには、わずか4ヶ月ほどの滞在だったが、成田についてからががっくりきた。日本では少子化が進むわけである。社会全体が子育てをしている人をバックアップするどころか足

を引っ張っているのである。可住地面積の狭いところに一億二千万人も暮らしているのがそもそも間違いなので、日本人の人口が半分くらいになるのはかえって望ましいと多くの国民が考えているから、子育てをしている人の足を引っ張っているに違いない。そういう意味では、日本国政府の少子化対策は、例によって民主主義の原則にかなっていない。もっとも、少子化対策とは名ばかりで、何もしていないに等しいのであるからいいのか。

〔結論〕

というわけで、レスブリッジ大学交換教授での派遣によるレスブリッジ滞在は、私にとっては、日本を映す鏡をきれいに磨くクロスであった。

6.3 レスブリッジ大学再訪―植木幹雄 北海学園大学法学部教授

1992年10月、レスブリッジ大学は創立25周年記念日を迎えた。晴天の午後、学生ホールの前庭で記念祝典が、夕刻から大学と同窓会共催の祝賀会が同ホールの最上階の会場で挙行された。その祝賀会で、同窓会から学生の利用に供するコンピューター5台の寄贈が大ニュースとしてテナント学長から報告された。当時のカナダ経済は下降一途の局面にあった。カルガリーやエドモントンでは建築途中のビルがそこここにあった。アルバータ州政府を後ろ盾にしたエアー・カナダの倒産も確実視されていた。さらに、学園との学生交換事業に対する州政府の補助が打ち切られた。しかし同事業は同窓会の援助での続行が学長から報告なされた。そのような状況では、先のささやかな寄贈も光明を伝える大ニュースとして扱われたのであった。

今回の10年ぶりの再訪に際して、施設の面での大学の変容に関して最初に印象付けられたのは、図書館と生化学研究所の新設であった。分けても驚きは、図書館の新設とその充実ぶりであった。かつて学生寮と地続きにあった記念モニュメント「The Aperture U of L」は、周囲が掘削され、道路となり、孤立した状態になっていた。その北側にあった駐車場を利用して劇場ホールと繋がる形態で、新図書館が建設されていた。かつての大学ホールの六層にあった旧図書館の後には、事務所と教室に改築されていた。旧の図書館前の中央ホールに面した集会所は、学生のコンピュータ利用の自習室に変わっていたのみならず、六層廊下の中央に学生たちが自由に常時利用できるコンピューターが20台ほど設置されていた。かくして、大学内から姿を消したのは、郵便局であった。

変容は施設に限ってのことではなかった。前回の訪問時のレスブリッジの総人口は約4万人、今回は7万人強となっていた。学生数は6,000人に増加、その内マネージメント所属の200人は、施設と教授人の不足のためカルガリーとエドモントン両大学に同数ずつ委託されている。今回の秋の卒業式は4時間弱で終了したが、春のそれは二日かかりとのことであった。前回の受け入れ窓口は廃止され、今回は「国際学生センター」であった。若い発展途上の大学だけあって、事務部局の改編と大学スタッフ人の出入り、そして制度の改編は迅速かつ頻繁になされている。例えば、学園との交流事業の初期に来園したアトキンソンはブロック大学学長であり、受け入れ窓口

の主任、アンドレアーはカルガリー大学に移籍していた。前年度までの成績評価基準ですら、すでに改正がなされていたといった具合である。

前回の赴任時に「日本週間」が開かれ、会場でお茶のお手前の手伝いをした。今回は「日本庭園」の茶室で、秋の終わりの一日、観光客相手にお手前を披露した。茶室の外の板の間のスツールに腰掛けたご婦人がいた。彼女は同行の婦人との会話から、英語圏以外から来訪者と思われた。新品の

夏のカーボーイ・ハットの彼女は、静かにゆっくりお茶を楽しんでいた。加えて今回は、妻の一週間の来訪に合わせて、劇場で三クラス合同の学生たちと市民を対象に「能」の紹介をする機会を得た。「通小町」のストーリーの説明、仕手が梅若万三郎・小鼓が妻の舞台のビデオ、国立能楽堂の演能での楽屋の様子ビデオ等を見せた後、妻の小鼓の伴奏付きで仕舞「熊野」のクセを舞うことができた。学生の一人が「すてきでした」と言ってくれたのは喜びであった。しかし、最大の喜びは受講生の一人がクリスマス・カードを寄せ、「すてきな学期でした」と言ってくれたことであった。

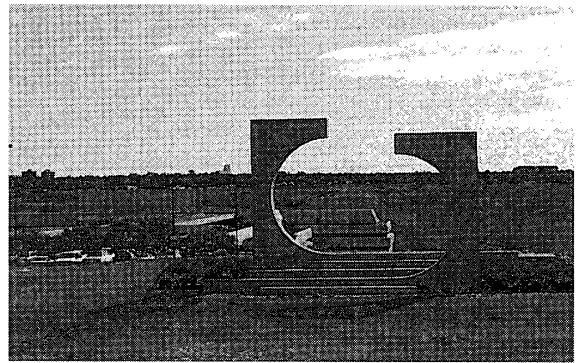


図12: The Aperture U of L (Photographed by Peter Green)

謝 辞

本稿の作成にあたっては多くの人のお世話になりました。R.ブーレ (R. Boeré) レスブリッジ大学教授、佐藤克廣法学部教授、植木幹雄法学部教授は交換プログラムに参加した感想をお寄せくださいました。また、マーク松根経営学部助教授には、カナダ・コース小委員会の業務を通じて大変お世話になりました。さらに、学校法人北海学園本部の鈴木正俊氏と福田眞理子氏、共通教育センターの館庸子氏、庶務課国際交流担当の栗原隆文氏が交流プログラムについての情報収集に協力してくださいました。ここに心からお礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 北海道総務部知事室国際課 (2001) 『北海道の国際化の現状』 p 18
村井忠政 (1995) 『ある日系カナダ人女性の生涯』 明石書店

資料1：レスブリッジ大学交流協定に基づく交換教授受入れ事業

北海学園交換教授（レスブリッジ大学派遣）

	派遣期間	氏 名	所 属
第1回	1984年（S59）9月～12月	村 井 忠 政	北海学園大学教養部教授
第2回	1985年（S60）1月～ 4月	立 谷 憲 二	北海学園大学教養部教授
第3回	1985年（S60）9月～12月	鳥 井 十三雄	北海学園大学教養部講師
第4回	1986年（S61）9月～12月	河 西 勝	北海学園大学経済学部教授
第5回	1987年（S62）9月～12月	佐 藤 克 廣	北海学園大学法学部助教授
第6回	1988年（S63）9月～12月	西 澤 悟	北海学園大学教養部教授
第7回	1989年（H 1）9月～12月	本 城 誠 二	北海学園大学教養部助教授
第8回	1990年（H 2）1月～ 4月	吉 田 省 一	北海学園北見大学商学部教授
第9回	1990年（H 2）9月～12月	小 島 康 次	北海学園大学教養部教授
第10回	1991年（H 3）1月～ 4月	東 谷 清 次	北海学園北見大学商学部教授
第11回	1992年（H 4）1月～ 4月	大 江 敏 美	北海学園大学教養部教授
第12回	1992年（H 4）1月～ 4月	吉 田 嘉 明	北海学園北見大学商学部教授
第13回	1992年（H 4）9月～12月	植 木 幹 雄	北海学園大学教養部教授
第14回	1993年（H 5）1月～ 4月	菊 池 均	北海学園北見大学商学部教授
第15回	1993年（H 5）9月～12月	川 端 俊一郎	北海学園大学経済学部教授
第16回	1994年（H 6）1月～ 4月	大 前 博 亮	北海学園北見大学商学部教授
第17回	1994年（H 6）9月～12月	小 池 直 子	北海学園大学教養部教授
第18回	1995年（H 7）1月～ 4月	米内山 昭 和	北海学園北見大学商学部教授
第19回	1996年（H 8）1月～ 4月	加 藤 信 行	北海学園大学法学部助教授
第20回	1996年（H 8）1月～ 4月	柳 川 博	北海学園北見大学商学部助教授
第21回	1996年（H 8）9月～12月	牛 丸 元	北海学園大学経済学部助教授
第22回	1997年（H 9）1月～ 4月	新 谷 眞 人	北海学園北見大学商学部助教授
第23回	1997年（H 9）9月～12月	河 西 勝	北海学園大学経済学部教授
第24回	1998年（H10）1月～ 4月	安 村 克 己	北海学園北見短期大学助教授
第25回	1998年（H10）9月～12月	當 麻 庄 司	北海学園大学工学部教授
第26回	1999年（H11）1月～ 4月	中 野 武 房	北海学園北見大学助教授
第27回	1999年（H11）9月～12月	君 島 東 彦	北海学園大学法学部助教授
第28回	2000年（H12）1月～ 4月	武 川 正 明	北海学園北見大学助教授
第29回	2000年（H12）9月～12月	二 通 信 子	北海学園大学共通教育センター助教授
第30回	2001年（H13）1月～ 4月	細 野 昌 和	北海学園北見大学助教授
第31回	2001年（H13）9月～12月	上 野 之 江	北海学園大学法学部助教授
第32回	2002年（H14）1月～ 4月	大 東 俊 郎	北海学園北見大学助教授
第33回	2002年（H14）9月～12月	植 木 幹 雄	北海学園大学法学部教授
第34回	2003年（H15）1月～ 4月	佐 々 木 啓	北海学園北見大学助教授

レスブリッジ大学交換教授(北海学園大学受入れ)

	滞 在 期 間	氏 名		専 門
第1回	1981年(S56) 9月~12月	Ian D.C.Newbould	イアン・ニューボルド	歴 史 学
第2回	1982年(S57) 4月~ 7月	William(Bill) M.Baker	ウィリアム・ベイカー	歴 史 学
第3回	1982年(S57) 9月~12月	Akira Ichikawa	アキラ・イチカワ	政 治 学
第4回	1983年(S58) 4月~ 7月	David W. Atkinson	デイビッド・アトキンソン	宗 教 学
第5回	1983年(S58) 9月~12月	Gordon Campbell	ゴードン・キャンベル	教 育 学
第6回	1984年(S59) 4月~ 7月	Bhagwan D. Dua	バグワン・ドゥア	政 治 学
第7回	1984年(S59) 9月~12月	George H. Zieber	ジョージ・ジーバー	地 理 学
第8回	1985年(S60) 4月~ 7月	Norman L. Buchignani	ノーマン・ブキナニ	人 類 学
		Doreen M. Indra	ドリーン・インドラ	人 類 学
第9回	1985年(S60) 9月~12月	Harold(Hal) J. Schroeder	ハロルド・シュローダー	経 営 学
第10回	1986年(S61) 4月~ 7月	Charles L. Crane	チャールズ・クレーン	芸 術 学
第11回	1986年(S61) 9月~12月	Marvin T. Sundstrom	マービン・サンドストローム	地 理 学
第12回	1987年(S62) 4月~ 7月	Ian B. McKenna	イアン・マケナ	経 営 学
第13回	1987年(S62) 9月~12月	Keith W.J. Parry	キース・パリー	人 類 学
第14回	1988年(S63) 4月~ 7月	Robert(Bob) A. Boudreau	ロバート・ブードロー	経 営 学
第15回	1988年(S63) 9月~12月	Kurt K. Klein	カート・クライン	農 業 経 済 学
第16回	1989年(H 1) 4月~ 7月	Allan(AI) S. Hunter	アラン・ハンター	会 計 学
第17回	1989年(H 1) 9月~12月	Patricia(Pat) M. Chuchryk	パトリシア・チャチリック	社 会 学
第18回	1990年(H 2) 4月~ 7月	James(Jim) D. Tagg	ジェームズ・タッグ	歴 史 学
第19回	1990年(H 2) 9月~12月	Wilma G. Winter	ウィルマ・ウインター	教 育 学
第20回	1991年(H 3) 4月~ 7月	Robert(Bob) G. Koep	ロバート・キャップ	教 育 学
第21回	1991年(H 3) 9月~12月	Ian R. MacLachlan	イアン・マクラクラン	地 理 学
第22回	1992年(H 4) 4月~ 7月	Alfred B. Young Man	アルフレッド・ヤングマン	ネティブ・アメリカン学
第23回	1992年(H 4) 9月~12月	Michael C. Wilson	マイケル・ウィルソン	地 理 学
第24回	1993年(H 5) 4月~ 7月	Richard A. Epp	リチャード・エップ	芸 術
第25回	1993年(H 5) 9月~12月	Alice H. Luther	アリス・ルーサー	芸 術
第26回	1994年(H 6) 4月~ 7月	Ludwig(Lu) Ganske	ルードウィック・ギャンスキ	教育メディア
第27回	1994年(H 6) 9月~12月	Jeffrey(Jeff) Spalding	ジェフリー・スポルディング	芸 術
第28回	1995年(H 7) 4月~ 7月	Robert(Bob) Gall	ロバート・ゴール	教 育 学
第29回	1995年(H 7) 9月~12月	Una Ridley	ユナ・リッドリー	看護学
第30回	1996年(H 8) 4月~ 7月	Gordon Dixon	ゴードン・ディクソン	経 営 学
第31回	1996年(H 8) 9月~12月	Rene Barendregt	レネ・バーレンドレック	地 理 学
第32回	1997年(H 9) 4月~ 7月	Mark L. Sandilands	マーク・サンディランズ	心 理 学
第33回	1997年(H 9) 9月~12月	Jennifer Mather	ジェニファー・メイザー	心 理 学
第34回	1998年(H10) 4月~ 7月	Dale Burnett	デイル・バーネット	教 育 学
第35回	1998年(H10) 9月~12月	Michael Stingl	マイケル・スティングル	哲 学
第36回	1999年(H11) 4月~ 7月	Dayna Dniels	デイナ・ダニエルズ	運 動 科 学
第37回	1999年(H11) 9月~12月	Vondis Miller	ボンディス・ミラー	芸 術
第38回	2000年(H12) 4月~ 7月	Margaret Winzer	マーガレット・ウインザー	教 育 学
第39回	2000年(H12) 9月~12月	Harold Schroeder	ハロルド・シュローダー	経 営 学
第40回	2001年(H13) 4月~ 7月	Robert Rogerson	ロバート・ロジャーソン	地 理 学
第41回	2001年(H13) 9月~12月	Lisa Doolittle	リサ・ドゥーリトル	演 劇
第42回	2002年(H13) 4月~ 7月	Lance Grigg	ランス・グリッグ	教 育 学
第43回	2002年(H13) 9月~12月	Rene Boere	レネ・ブーレ	化 学

Canadian Studies Course Teaching Guidelines

1. Purpose of the Course

This course is offered through the General Education & Research Center. It is opened to students from all the faculties (Faculties of Economy, Business Administration, Law, Humanities, and Engineering). The language used in these classes is English, which makes each session a good practice of reading/listening English. However, the main motivation/purpose of the students who enroll this course is not to learn English but to learn about Canadian nature and society. As a result, please note that many of the enrolled students have rather limited ability of English. This is why you will be assisted by a regular Hokkai-Gakuen faculty member who will act as a section coordinator. He/She will translate your lectures into Japanese sentence by sentence. Even though the lectures are translated into Japanese, it is still advisable to make it easy to understand, using simple words and speaking slowly

2. Course Sections

The visiting professor is requested to have four course sections per week. In some years all four sections are Canadian Studies course content. In the other years three of sections are of Canadian Studies course and in the fourth section the visiting professor assists in teaching a course officially assigned to another faculty member. In this case, administrative management of the course (i.e. grading) is the responsibility of the Hokkai-Gakuen University faculty member and the class sessions are team (pair) taught by both professors. Within the Canadian Studies course teaching duties, one section will be taught in the evening program (night school), while the others are in the day program. In accordance with the Hokkai-Gakuen University academic regulations, each section is required to have at least twelve sessions (including examinations) through the course of the semester.

3. Coordinator

As mentioned in section 1, the visiting professor gives lectures with the coordinator, who is usually different from section to section. The coordinator has many roles. He/She arranges/organizes classes in various situations (e.g., lectures, examinations, and grading). The key role is to act as a liaison between the visiting professor and students by translating the lecture in English into Japanese and students' questions in Japanese into English. We hope that the cooperative work of the visiting professor and the coordinator gives students a better understanding of Canada and Japan, bringing a relaxing and attentive atmosphere to the class.

4. Course Handouts

One week ahead of the initial session, the visiting professor is requested to write a course outline and a short introduction to him/herself and give them to Ms. Yoko Tachi, the administrator for the Canadian Studies course, in the General Education and Research Center, and to coordinators. She will prepare photocopies of the lecture notes for the students. There is no formula for the format.

In later sessions, the visiting professor is requested to provide handouts to Ms. Tachi and a copy of the transcript of his/her lecture to each coordinator about a week ahead of each session. (This is necessary for the coordinators to prepare for the translation in class. Since they are not special-

ists in your field, they need time to figure out the Japanese terminology. In addition, knowing what is going on in the class gives them confidence and more time to relax in class. You can send a text file of your lecture notes (transcript) to coordinators by e-mail.) There is no formula for them, either.

Please note that students' reading/listening comprehension of English is not so good as you might expect. Most of them need that the coordinator translates sentence by sentence. Therefore, to make the points clear to them, please write a moderate amount of transcript (about 3-4 pages in single space) and read it slowly.

5. Office Hours

There are no written guidelines for the visiting professor's office hours. Officially, the visiting professor is not required to have office hours for student consultation. However, from an educational point of view, we would greatly appreciate it if he/she could offer 2-3 office hours per week.

6. Examinations

The visiting professor is responsible for the examinations, including their frequency and format. Since there are normally 400-500 enrolled students and many of them have limited ability of English, most visiting professors in recent years have given machine marked multiple-choice examinations. The frequency has usually been twice a semester.

Since each examination is held three or four times, corresponding to the number of sections taught by the visiting professor, it is always possible that some students try some method of cheating to get a higher score on the exam. Recent examples include receiving information from friends in other sections who write the exam earlier, or sneaking into an earlier section of the course only to pick up a copy of the exam. Considering such situations, it may be advisable either to make the exam consisting of different questions for each section, change the order of the problems for each section, and have the question sheets with students' ID's and names returned as well as the answer cards at the conclusion of the exam. Taking attendance by having students place their ID cards on their desk during the examination may be effective for preventing unregistered students from trying to pick up a copy of the exam in advance of their own test.

After a given class section has completed an exam, the visiting professor is asked to immediately pass the student mark cards to the Canada Course Sub-Committee assistant, Mark Matsune. He will then run the exams through the mark card reader and pass the raw data on to either Professor Yukie Ueno, Professor Haruko Ishii, or Mark to be scored and processed (using the 4th Dimension application program). After this is complete they will return the results to you. You can then announce the results in the following lesson.

* Note: If you would like or are able to process and score the raw data yourself (i.e. using Microsoft Excel), please make those arrangements with Mark.

** The exam processing procedure is currently under revision. In the near future, it is possible that either the visiting professor, Coordinators or the Canada Course Sub-Committee assistant will use the Excel formula devised by Prof. Boeré in 2002 to grade the examination. This change is intended to make the grading process more flexible.

7. Grading Sheet Procedure

Upon completing the semester, the visiting professor is responsible for compiling the students'

grades and recording them on the official computer grade forms provided by the faculty office.

7.1. Basic Guidelines

On all computerized grading sheets, detailed course information is located (in Japanese) at the top left. For all grading sheets, there are a few basic guidelines:

1. The instructor should try to be flexible in assessing the grades according to the standard Hokkai-Gakuen University grade scale. According to the instructor's discretion, it is desirable to give 70 - 80% of the students a passing grade in the course.
2. Grades should follow the HGU standards as printed in the students' course handbook;

Passing grades:

- 80 or above = **A**
- 60 - 79 = **B**
- 50 - 59 = **C**

Failing grades:*

- 49 or below = **D**

Students who have NOT taken any of the exams during the semester or have been absent 1/3 or more of the class meetings = **E**

* **D** means that the student has taken one or more of the exams during the term and/or has attended the class at least 2/3 of the lessons, **but** that his/her work is not at a passing level; **E** means that the student has NOT taken any of the exams during the semester and/or has missed 1/3 or more of the lessons, which is not acceptable under the HGU attendance regulations.

3. First, the visiting professor is requested to complete a "Final Grade Class List" (*Seiseki Hyo* form) for each course. This form can be obtained from the General Education Office staff and will be used for posting the grades for the students. It is desirable to have approximately **one week** for the students to confirm their final posted grade prior to the visiting professor's departure from Sapporo. This is intended to allow students the chance to make inquiries regarding possible discrepancies in their grade. In the event of a student appeal, the chairperson of the Lethbridge Canadian Studies Committee will handle the matters (with the exam and grading records left by the visiting professor).
4. After completing the "Final Grade Class List", please transfer these grades to the "Computer Grading Sheet" which will be used by the administrative staff to prepare the official student transcripts.
5. Finally, please return all completed "Final Grade Class Lists", student exam papers/computerized answer sheets and "Computer Grading Sheets" **directly** to the General Education & Research Center (*Kyotsu-Kyoiku* Center) staff.

7.2. Computer Grading Sheet

Please follow the instructions below to complete the computer grading sheets:

1. Grades are to be written in PEN (ink) in the appropriate place (see Figure 1 and explanations below). Fill in the corresponding bubbles for computer scanning in PENCIL (or SPECIAL COMPUTER MARKCARD PEN --- NOT regular pen). Please do this carefully. If there is any discrepancy between the written grade and the computer bubble grade, the office will assume that the grade that is written in PEN is the intended grade, and the office will change

- the computer bubble grade so that it matches the grade in PEN.
- If you make an error, cross out the incorrect grade with a DOUBLE LINE, write in the correct grade next to it, and SIGN your name or initials to certify the change. Be sure to change the penciled-in bubbles as well by erasing completely.
 - When you have completed marking the grades, your Canadian Studies course coordinator will SIGN or place their PERSONAL SEAL on each page.

EXAMPLE COMPUTER GRADING SHEET:

- In column 3, mark the grades (IN PEN) for each student using the letters A through E.
- In column 4, fill in the corresponding computer bubbles.
- You may ignore columns 1 and 2.

《 第1・2学期用 》

採 点 票

1/1頁

1部 Course Information (Please ignore)

【科目名】 【学期】 第1・2学期

【担当者】

印

Coordinator's Seal (Please ignore)

【学年】 【単位】 【曜日】 【時間】 【履修人数】

Class Student ID Student Name

クラス	学生番号	氏 名	評価 (ペン書き)	※ 評価 マーク欄 A B C D E	備 考
A1	1101101	経済 太郎	A	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ E	
C1	1501101	経営 次郎	D	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ E	
C1	1501102	北海 花子	E	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ E	
C2	1501201	北海 一郎	B	☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ E	
C2	1501202	学園 三郎		☐ A ☐ B ☐ C ☐ D ☐ E	2001/6/30休学

Please ignore ① and ②

Fill in the corresponding bubble.

① ② ③ ④

Enter the letter grade

Figure 1 : Sample of the computer grading sheet.

資料3：2003年度「カナダの自然と社会Ⅰ」講義概要 [B・ドゥア (B. Dua) 教授担当]

CANADIAN STUDIES: Course Outline

This course is designed to introduce you to Canada, past and present. However, as the time at our disposal is very limited, only a limited number of topics that have a bearing on the Canadian way of life shall be discussed.

Course structure

The course will be delivered in English through lecture notes. To facilitate communication in Japanese, the course will be coordinated by one of the Professors - Prof. Haruko Ishii, Prof. Haruhiko Shiokawa, Assoc. Prof. Atsuo Okazaki - from your campus.

Examinations

There will be two examinations. One will be the mid-term examination worth 40% and shall be given after we have covered sufficient course material; the other will be the final examination worth 60%. The final examination will be given in the first week of July 2003. Your grade will be determined based on your performance in these two examinations. Both the examinations will be in multiple-choice format.

I will follow the grading scheme of your University: 80% and above = A; 60-79% = B; 50-59% = C; **Failing grades:** 49% or below = D; and E where needed.

Textbook

Although there is no textbook for the course except class notes, students are encouraged to explore relevant Canadian literature wherever they can find.

Course topics

The course is divided into several sections. One or two lectures will be devoted to each section.

1. An Overview of Canadian Society
 - a. life style of students
 - b. life style of ordinary citizens - economic, social, cultural, political
 - c. bilingualism and multiculturalism
2. Introduction to Canada
 - a. Canadian geography
 - b. resources; population distribution; regionalism
3. Canadian History
 - a. historical episodes
 - b. the burdens of history
4. Canadian Economy
 - a. some basic facts about economy
 - b. continentalism
5. Canadian Politics
 - a. the constitution
 - b. parliamentary and federal system
 - c. elections, parties, and politics
6. General Overview: Canadian Personality and Culture

資料4：レスブリッジ大学での上野講義概要 (2001年)

University of Lethbridge
Japanese and Culture (IDST 2008A)
 Course Schedule
 Tuesday & Thursday, 3:05pm – 4:20pm, TH 133

Thursday	Tuesday
September 6 Introduction	September 11 Japanese Sounds
September 13 Climate and Seasons	September 18 Japanese Words and Expressions (1)
September 20 Traveling in Japan	September 25 Japanese Words and Expressions (2)
September 27 History	October 2 Japanese Greetings (1)
October 4 Japanese Gesture	October 9 Japanese Greetings (2)
October 11 Religions & Customs	October 16 Table manners
October 18 Japanese School System	October 23 Exam 1
October 25 Common Life Style of Today	October 30 Holidays
November 1 Food & Dishes	November 6 Young Generation
November 8 Japanese Housing	November 13 Japanese Performing Arts
November 15 Japanese Society	November 20 Presentation
November 22 Presentation	November 27 Presentation
November 29 Presentation	December 4 Presentation
December 6 Presentation	December ? Exam 2

Instead of completing of the two written tests, a student will complete a **personal journal**. The purpose of writing the journal is to give opportunity for the student to further explore some of the topics presented by Prof. Ueno and to compare and contrast one's own ideas and experiences with those presented in class. These are the specific expectations for the journal:

- 1) The journal is to be written by the individual student and is to express his or her personal thoughts and ideas.
- 2) The professor encourages each student to share cultural differences and personal opinions in their journal so that the professor can personally learn more about Canadian culture and thought.
- 3) The journal should also contain the summary of each class and at least one to two typed, double-spaces pages for each class.
- 4) The portion of the journal is to be completed before each exam day and to be turned in on the same days as the written tests are given.
- 5) The personal journal can be sent by e-mail to : yukie.ueno@uleth.ca
- 6) Write the date of each class on the top of your page.

資料5：レネ・ブーレ レスブリッジ大学教授報告（原文）

A view on Teaching at Hokkai-Gakuen University in Sapporo

by René Boéré, Ph. D., Professor of Chemistry, The University of Lethbridge, Lethbridge, AB Canada.

I arrived in Sapporo on September 9th 2002 to participate in the *Canada Course*, a two-credit course in the second half of the Hokkai-Gakuen University school year. The course has been running since the early '80's as part of an ongoing Japan-Canada cultural and educational exchange with my own university, the University of Lethbridge in Alberta, Canada. Despite many discussions with previous Exchange professors and asking lots of questions around the UofL, I arrived here with only the vaguest idea of what the job would entail. Certainly teaching *Canadians* is far from my own disciplinary expertise in the Natural Sciences, and I had already decided to focus on my personal knowledge of the landforms and history of Canada. But beyond this notion I really had no idea as to what would be possible.

Hokkai-Gakuen has a strong commitment to international education and has extensive foreign language educational programs. This is a good thing, since few Lethbridge professors have any proficiency in Japanese, let alone enough to give a University course. Indeed, HGU chooses to have the Lethbridge professors give their lectures in English, *and hold the examinations in English as well*. This is a very courageous stance! The *Canada Course* is open to all HGU students, the majority of the enrolments coming from 1st and 2nd year students regardless of English proficiency. To assist such students and the Lethbridge professor, each class is assigned a Japanese faculty member as Coordinator, who among other responsibilities provides sentence-by-sentence translation for the lectures. HGU provides the following description of the exchange course in one of its official publications: "Exchange professors from the University of Lethbridge give lectures on a wide variety of topics, including Canadian society, history, culture and geography."

My precise job description was to teach four sections of the *Canada Course* - with identical content, but enrolments varying from a low of about 25 to a high of over 250. Each section met *once per week* for a 90 minute class and each class met from 12 - 14 times during the term, as statutory holidays affected some of the sections. When I arrived in Sapporo, I discovered that HGU employs a full-time professor of Canadian Studies, Jane Sellwood, who teaches courses on Canadian culture and literature to advanced students. This discovery caused me to ask my coordinating committee what my purpose in being here really was. The answer I got was astounding, something along the lines of: "You are the embodiment of Canada to the students". Scary stuff! I thus had virtual *carte blanche* to construct a course with a freedom that teaching Chemistry rarely affords. However, there were some real constraints on what I could realistically achieve, and I spent most of the first few weeks at HGU trying to figure out what really *was* possible. I would like to share the answers I came up with, with the hope it will help others who will follow me in the Exchange.

- Meeting a class for a single 90 minute period is a *de facto* norm of the Japanese university system, and quite different from the North American norm of a 3 credit-hour course. At the U of L, we meet our classes either three times a week for 50 minutes or twice for 75 minutes, so I do have some experience with class periods longer than an hour. But 90 minutes is a really long time, especially for students listening to a lecture in a language not their own and *via* translation. I thus did my best to include some sort of diversion in each class, typically a slide show or one or more video

clips. I felt that lecturing non-stop for 80 or more minutes was not acceptable.

- The Japanese system compensates for the single weekly class meeting by specifying many more concurrent courses than the North American norm of five three-credit-hour courses per semester, so I had to be very careful to scale my expectations of the student's out-of-class work accordingly. In practice, I required only that the students read the lecture transcripts to determine the answers to study questions that I prepared in advance of the tests.
- Although I started by thinking of the course as about half the length/density of a UofL course, I soon realized that, after allowing time for translation, I would be able to cover no more per week than in a single 50 minute period at home. That brought me to a much more realistic estimate of one-third of a UofL course's density, or less. I quickly had to revise downward the number of different topics that I would be able to cover, choosing for more thorough coverage of fewer topics over a more cursory treatment of a larger number. Fortunately, HGU permits professors to revise course outlines on the fly, an absolute no-no at the UofL!
- It was necessary to provide a complete transcript of each lecture, at least a week ahead of time, to allow the coordinators to prepare for translation. After a bit of calibration in the first few weeks I found that the maximum length of one session was about 3600 words. Once allowance was made for the AV material that I tried to bring into each class, the *average* length of my lectures was reduced to a more realistic goal of about 3000 words. I figured that 10 to 12 classes at 3000 words each totals a mere 30000 to 32000 words total, which is fundamentally a restricted amount of material that I would be able to cover.
- The English ability of the coordinators varied considerably. Some were linguists by trade, with the ability to spontaneously translate what I wished to say *ad lib*, but others needed to work from a pre-translated transcript. Hence each class had its own distinct flavor as a result of my interactions with the coordinators. On the whole I felt duty bound to limit extemporaneous comments to the absolute minimum, out of consideration for both my coordinators and the students.
- Almost all Japanese students take many years of instruction in English as a second language in school, and many continue to study the language at University. However, apart from a few who become English majors or are particularly gifted at or interested in language learning, their understanding of the language is limited. I realized that this situation is almost an exact parallel to that of school French for Anglophone Canadians. I imagined myself as a unilingual French-speaker teaching a course at the University of Lethbridge which would be taken by a cross-section of the student body; some will be French language majors, who will inevitably excel, but the majority will have to rely on whatever ability they have from their compulsory language courses in school. This exercise helped me to give the students here due credit for the tough challenge they faced with the language.
- Although I was certain that many of them enrolled in the course out of genuine curiosity about Canada and Canadians, it seemed to me that many were also looking for some sort of an easy liberal arts credit towards their own degree programs in areas as diverse as Literature, Economics and Engineering/Computer Science. Such students were obviously expecting to do as little as possible while still obtaining a passing grade. HGU has high academic standards, and expects as much as 20% of the class to either stop participating or fail the exams. (*Withdrawals* as we know them do not seem to exist.) So there were definitely some tensions in the course, and I felt that my greatest difficulty was in knowing just how difficult to make the tests and what level of work I could ask of the class.

- I felt that a lecture format was the only real possibility for the course. While conversational formats were theoretically possible in the smaller classes, they were definitely ruled out in the large enrolment sections. In practice I could not manage two different course preparations, so I ran the small and large classes more or less the same way. I also discovered that it was almost impossible to engage students conversationally in class. This I feel is both a cultural norm of the Japanese classroom and a consequence of the embarrassment most of them felt at using what English language ability they had. On the other hand, outside of class it was usually possible to hold a simple conversation with them one-on-one.
- I felt that the only way that I could realistically evaluate over 400 students within the time available was to use automated grading and a multiple-choice format for the tests. I therefore worked hard to create tests with very clear questions. Many had answer choices that would allow the selection of the best answer if a student had only general familiarity with the material. All my questions were based on previously released study questions. I also analyzed the results statistically and removed from the test any questions that had random outcomes. To assess this in a simple manner, I compared the performance of the whole class on each question with the performance of those who achieved over 70% on the raw score of the test. If even the strong students missed a question, I considered it inadmissible in the test. In practice I had to remove a couple of questions from a few of the tests.
- The students definitely needed some sort of lecture summary or course transcript in order to study for the examinations. I chose to provide the full transcript of my lectures along with definitions of key or obscure terms (i.e. those where a dictionary translation was likely to lead them astray or leave them with ambiguities), and copies of diagrams and maps that were required to understand the lecture material. I realized that it would be very easy to hand out lots of photocopied textual material, but I tried to ask myself how many pages of text *I* would be able to read, let alone study in detail, in a foreign language, and basically avoided extra reading assignments beyond the lecture transcript.
- As a supplement to the oral lecture, I also prepared a PowerPoint presentation for each class, trying to find photographs, diagrams and maps to illustrate the lecture content. Much of my material was of a historical and geographical nature, and I used the Internet extensively to source the appropriate maps, diagrams and pictures. I also had scanned a large number of my personal photographs of Canada into my computer before coming to Japan. This helped me to follow my philosophy of lecturing as much as possible on material that I was personally familiar with from my own travels and vacations in Canada.
- When writing, I worked hard to try and keep my language simple and clear, which is no easy task. I don't think that I always succeeded at this, and at times there simply was not enough time to keep revising the transcripts to improve the language level. I would very much have preferred to have access to a competent English page-editor to review my writing before it was shipped to the coordinators for translation. But I did what I could with the tools available. Thus, as well as monitoring the length of my lectures, I also used the word processor's statistical functions to monitor the word-to-character ratio. I strove to keep this ratio to 4.6 ± 0.2 . Lower was virtually impossible given the number of inevitable large words such as *Saskatchewan*, but any higher than this and I would find that I had slipped into using unnecessarily complex words in the ordinary speech parts of the lecture.

This summary provides a short description of the constraints on teaching the *Canada Course* that

I felt were operative during my brief tenure at HGU. I hope that I was at least partially successful at genuine cross-cultural communication, and that at least some of the enrolled students learned Canadian history and geography effectively. I definitely learned a great deal about my own country, and am the richer for the experience. Of course, I also experienced life in a very different and fascinating culture, and made many friends within and without the academic community, which I hope will last for many years to come.

資料6：上野渡航時（2001年）のスケジュール及び準備の詳細

（1）渡航までのスケジュールの詳細〈2000年12月〉

交換プログラム交換教授として承認される。

〈2001年2月〉

レスブリッジ大学学長から招請状が届く。担当講義は Interdisciplinary Studies における Japan and the Japanese (IDST2008A) である。その他に、日本に関する学内外講演シリーズに講演者として講演を要請されることもある。この招請状は就業ビザ申請の際、カナダ大使館に提出する。

〈2月〉

インターナショナルセンターの担当職員より授業期間、雇用待遇の詳細、通訳は必要か、講義が始まる数日前に来るように等の情報と講義アウトラインを送れという内容の手紙が届く。これもカナダ大使館に提出する。レスブリッジ大学から支給されるもの：1）本人分の往復航空旅費、配偶者同伴の場合は、本人の半額（片道分）が追加支給される。2）1日50カナダドルの支給、毎月末に支給される。3）宿舎（家賃、光熱費等すべてレダ負担であるが電話料金、洗濯料その他個人的費用は本人負担である。以後、事務連絡はインターナショナルセンター担当職員とするとよい。International Centre for Students, the University of Lethbridge, 4401 University Drive, Lethbridge, Alberta T1K 3M4, CANADA

レスブリッジ大学ホームページ

<http://home.uleth.ca/>

<http://home.uleth.ca/postcards/> キャンパスの様子がわかる

<http://home.uleth.ca/reg-rcr/students/photos.html>

〈2～3月〉

講義アウトラインをレスブリッジ大学に送付。これが大学の講義概要に載る。連絡はe-mailもしくはファクスを利用するので迅速に行われる。それとともに、授業で使う機器も知らせておくといよい。教室では、OHP, VCR, が使える。Visual Projector はRGB対応なのでラップトップのコンピュータに接続してPowerPoint Presentationができる。ラップトップのコンピュータは図書館2FのMedia Centreにて貸し出しをしている。しかしCheck in, Check out 時の記録のトラブルが多い。その結果1時間1ドルの返還遅滞金を請求されたりひどい目に合う可能性が高い。その辺の事を考慮に入れて利用するとよい。その外ここではテープレコーダ、スライドプロジェクタ、8mmビデオカメラ等借りられる。IDを提示してすべて無料。

〈4～7月〉

カナダ大使館に就業ビザ（査証）の申請をする。（<http://www.cnanadanet.or.jp/>このホームページから申請書をダウンロードできる。レスブリッジ大学からの招請状、インターナショナルセンターより雇用待遇の詳細、本学の在職証明書（庶務課作成）、戸籍謄本、パスポートの写し、写真、申請料（1万2千円）等が必要。詳しくはホームページを確認のこと。一番遅くとも出発の3週間前までに提出するように求められている。たいてい1度はなんらかのミスがあり戻って来るといった方がよい。遅くとも5週間前までに提出すること。早くて困ることはないの、書類がそろい次第できるだけ早く申請した方がよい。家族を同伴する時は家族の分も申請が必要。申請のいらない旅行者ビザは3ヶ月間有効だが、それ以上は必要である。

就学児童を同伴し現地の小、中学校に入れる場合は学生ビザ（Student Authorization）（1万円）が必要。現地の学校と事前に連絡をとっておくとよい。インターナショナルセンターに連絡すると、センター職員がSchool District, Nicholas Sheral Community Schoolの職員と連絡を取り連絡先を紹介してくれる。ただ申請手続きは現地到着後親がしなくてはならない。

〈4～7月〉

航空券の手配（エコノミークラス。往復。）レスブリッジ大学から支給された金額は5,800ドルであった。到着後小切手ですぐに支払われた。航空券の領収書は英文のものを作成していったが、必要ないと言われた。しかし、念のため持っていった方がよいかもしれない。

〈4～7月〉

荷物を郵送する。郵送する荷物があるなら、カナダまで船便で1ヶ月半かかるのでそろそろ送る。送り先はインターナショナルセンター。到着まで預かってくれる。SAL 船便でみかん箱ひとつ5～8千円くらいかかる。講義の種類にもよるが、日本文化、歴史の資料は研究室にそろっている。持っていくとしたら、新しい統計資料が役に立つ。文房具はほとんどそろっている。

〈4～7月〉

レスブリッジ大学に提出するもの。インターナショナルセンター宛にファックスする。

1) 講義アウトライン

2) カナダ到着日時, 帰国の日程

レスブリッジには空路で入らなければならない。出るときも同じ。旅費支給上の都合があるのか、空路を使うように決められているようだ。魚雷のような18人乗り、パイロットが見えるプロペラ飛行機でレスブリッジ入りとなる。乞うご期待。出迎えの都合があるので決まり次第知らせるとよい。

3) 旅行傷害保険の番号。

クレジットカード付帯の傷害保険の他にもうひとつ加入する必要がある。レスブリッジ大学側は保険の番号を求めてくるので、クレジットカード付属の海外傷害保険では対応できない。

アルバータ州は州の健康保険に加入していない場合、病院での診察料が初回25ドルかかる。私と娘が1回ずつかったが、旅行傷害保険会社に領収書と診断書を送付するとすぐ全額リファンドしてくれた。保険加入料は6ヶ月で4万円強だった。

4) Tax Waiver Form

私はカナダ滞在中〇〇ドル以上の収入は得ませんという誓約書。インターナショナルセンターに問い合わせ、日当より総合計金額を計算し6,000ドルとした。

<4~7月 北海学園大学に提出するもの>

1) 在外研修・海外出張手続き

招請状、インターナショナルセンターより雇用待遇の詳細、(和訳必要)、航空運賃見積もり又は領収書、旅行日程、パスポートコピー、旅行日程など結構細かく書かねばならない。おまけに、英文文書には和訳をつけないといけないので、早めに処理しておくといふ。最低出発の3週間前までに提出しなければならない。これを受けて、大学より海外出張仕度金が支給される。(5万円くらい)

2) 私学共済海外診療報酬明細書

庶務課から受け取る。個人で掛けた旅行傷害保険の他に、もしもの時は私学共済からも10余パーセント支給される。

<4~7月 授業の準備>

講義の準備に役立つ参考文献とウェブサイト。

1) データ集

日本貿易振興会(ジェトロ). 2003. *Nippon 2003 Business Facts and Figures*. 日本貿易振興会.

朝日新聞社. 2003. 朝日新聞ジャパン・アルマナック 2003 (*Asahi Shimbun Japan Almanac 2003*). 朝日新聞社.

スクリーチ, プライス, 大島. 1997. 「トレンド英語日本図解辞典」 小学館.

佐藤猛郎. 1992. 「ハンドブック英語で紹介する日本」 創元社

2) 参考文献

NHK 国際局文化プロジェクト編, ダン・ケニー (訳). 1997. 「英語で話す日本の文化」. 講談社.

エドウィン・ライシャワー他 (監). 1993. 「英文日本大辞典」 (*JAPAN An Illustrated Encyclopedia*). 講談社.

川内彩友美 (編). 1998. 「まんが日本昔ばなし」 (*Once Upon a Time in Japan*). 講談社.

Pictorial Encyclopedia of JAPANESE LIFE and EVENTS. 1993. Tokyo: GAKKEN.

Pictorial Encyclopedia of JAPANESE CULTURE. 1987. Tokyo: GAKKEN.

The Japan of Today. 1996. Tokyo: The International Society for Educational Information, Inc. (3年ごとに改訂版が出ています)

Views of Japan Urban. 1996. Tokyo: Urban Connections Inc.

E-mail: views@infoasia.co.jp HP: <http://www.infoasia.co.jp>

3) ウェブサイト

北海学園ホームページ <http://www.hokkai-s-u.ac.jp>

レスブリッジ大学ホームページ <http://www.uleth.ca/>

文部科学省 <http://www.mext.go.jp/>

国際観光振興会 <http://www.jnto.go.jp/japanese/hello/culture/>

3.1) 検索サイト

Yahoo Japan <http://www.yahoo.co.jp/>

Google Japan <http://www.google.co.jp/>

3.2) 辞書サイト

英辞郎 <http://www.alc.co.jp/>

3.3) 新聞サイト

読売新聞 <http://www.yomiuri.co.jp/>

朝日新聞 <http://www.asahi.com/>

3.4) インターネットテレビ・サイト

NHK ニュース <http://www.nhk.or.jp/>

STV ニュース <http://www.stv.ne.jp/news/index.html>

TBS ニュース <http://news.tbs.co.jp/>

(2) その他必要なことの詳細

1) 出張中の郵送物管理

留守中のメールボックスの管理，郵便処理，書留の受取人，研究費の処理，e-mail の処理等，庶務課や学部事務と協議するとよい。

2) 出張中の北海学園大の電子メール管理

出張中の電子メールボックスは出張先でも使える。LAN 委員会又はコンピュータ実習室に問い合わせるとよい。

3) おみやげ

レスブリッジに着くと，いろいろな人のお世話になる。食事に呼ばれたり，車で送ってもらったりすることも多数ある。こちらの感謝の気持ちを伝えるのに，小さな（大きくてもよいが）贈り物を用意していくと気分的に楽である。食事の招待を受けたときに，日本の食品（お茶，お菓子，等），子供へのおみやげ等を持参すると喜ばれる。適当なものが手元に無い場合は，花束，チョコレートの詰め合わせも喜ばれる。

4) レスブリッジ大学長に記念品

歓迎レセプションで記念品の交換があるので，なにか持っていくとよい。（これは個人負担がよいものかどうか疑問）レスブリッジ側からは分厚いカナダの写真集が贈られる。

5) 学長に出発の挨拶

レスブリッジ大学学長への伝言等を聞いておく。2001 年度の派遣時には熊本学長から，レスブリッジ大学への学生長期派遣について，北海学園大学側の希望を伝えてほしい旨の伝言を預かった。レスブリッジ大学でケイド (Cade) 学長に伝えたところ以外に早く実現したので驚いている。

6) トラベラーズチェックまたはカナダドルの購入

買い物はクレジットカード (VISA, MASTER 等, JCB は使用不可) でできるが，カナダ到着早々に，少額紙幣，小銭があった方が何かと便利である。円を現地で両替するのも一案である。カナダドル現金をいくら持っていくか悩むところだが，チップの支払い (15%) があるので，当初の費用として細かな紙幣で数百ドルは持って行った方がよいと思う。タクシーの支払いもカードでできるそうだが，試した事はない。到着したらすぐ，旅費の支払いをしてくれるので，直接レスブリッジに行く場合は現金はそれほど必要ないかもしれない。

7) クレジットカードによるキャッシング

カナダはキャッシュレス化が日本より進んでいる。銀行の ATM で日本のクレジットカードによる現地通貨現金引き出しは簡単にできる。引き出した金額はキャッシングとして日本の口座から日本円で引き落とされる。100 ドル単位。VISA, MC カードならどこでも使える。ATM 利用の際，クレジットカードの暗証番号 (Pin Number) が必要なので確認しておく必要がある。

8) 携帯電話

日本からもっていくと日本を経由して通話するそうなので，割高という話を聞き，現地調達にした。プリペイド pay & talk plan が便利である。現在は海外からも使える携帯電話が発売されている。

9) 持参のコンピュータ

アパートでも仕事をしたい時は，持っていくと重宝する。アパートには学内 LAN の端子があるので，研究室と同じようにメール，インターネットができる。月 35 ドルの使用料はレスブリッジ大学で負担する。高速でダイヤルアップより速い。インターナショナルセンターに言えばすぐに接続手続きをしてくれる。また，ラップトップは授業で使用することもできる。RGB 接続端子は日本と同じである。トラブルが発生した時は Faculty Computer Support Centre に持って行くと専門の職員が 2, 3 日で点検修理してくれる。（ウィルス感染もここで見てもらった。）LAN 接続線はアパートにあるので持参する必要はない。

パソコンを持参する場合，空港でのセキュリティーチェック通過の際，毎回電源を入れて見せなければならない。

バッテリーの充電を忘れてはいけない。また、電源アダプターは国際仕様でカナダの110 Vに絶えられるかどうか事前に確認が必要である。

(3) 現地到着後：生活の準備に関する詳細

1) 担当職員との打ち合わせ

インターナショナルセンターにて担当職員と事務打ち合わせをする。宿舍と研究室は2001年度は8月26日より入居できた。翌週レスブリッジ大学学長と面会、9月中旬のレセプションの日程等が伝えられる。その他、研究室と宿舍の鍵、e-mail address、自宅住所、電話番号、研究室電話番号、コピーカードをもらう。電話は市外通話分は自分で支払う。

2) 身分証明書作成

クレジットカード大のカードでFacultyの文字と写真がついている。これで図書館で文献、ビデオの借り出し、スポーツ施設の利用等すべてできる。9.11テロ後、厳しくなった空港でのセキュリティチェックもパスポートのかわりに使用できた。

3) 銀行口座

大学の近くの銀行で口座を開く。パスポート、写真入り身分証明書、住所、電話番号、旅費支払いの小切手、等を持参する。口座の種類が多様である。毎月の利用回数、利用金額に応じて自分にあった口座を作る。こちらの口座は利用回数により、ある限度を超えると手数料を支払わなければならない。日本と同じようにキャッシュカードが発行される。これでATMでのキャッシングができ、Debit Card(Interac)としても使える。こちらはプラスチックマネーでの支払いが主流となっている。小切手を切っている人はほとんどいない。小切手は受け付けないと表示をしている店もある。毎月月末に給料が小切手で渡される。(1,500-1,800ドルくらい)これを銀行でキャッシュにすることができる。

または、銀行口座を開かないということもできる。その場合は買い物は現金または自分の日本のクレジットカードで行うという方法もある。

4) 就学児童

小学校への転入は、15th StreetにあるEducational Board of District 51(教育委員会)、433-15th St. South, (tel) 403-380-5298, (fax) 403-327-4387に出向き、パスポートおよび学生許可証を提示し、転入に必要な書類をもらう。その後、小学校を訪れRegistrationする。レスブリッジでは小・中学校に学区制はなく、大学のように学期開始前の週に通学したい学校で登録手続きをするようだ。自宅より離れた学校に通う場合は毎朝市営の通学バスが迎えにきてくれる。交換教授の場合は親が就労して税金を納めているので学費は免除される。給食はない。日本では小、中学校で給食があるのが常識だったが、カナダでは昼食は家に帰って食べるか、お弁当を持参するのが当たり前である。

大学の近くにはNicholas Sheran Community Schoolがある。各学年2クラス、幼稚園(5歳)から小6まである。小学校も9月第1週から始まる。School fee, \$24を支払う。学期前に準備する文房具のリストをくれるのでそろえておく。大体リコーダー、カラーペン等日本の学校とほぼ同じであった。

同じウェストサイドにはカトリック系の小学校もある。こちらはバス通学で10分くらいであるが、住人の評判を後で聞くと後者の方がよかったようだ。